

# 富山県上市町柿沢古墳群

## 第1次測量調査報告

上市町教育委員会  
富山大学考古学研究室

1993年3月

## 序

昭和56年暮に藤田富士夫氏によって発見された柿沢古墳群は、古墳時代後期の群集墳と考えられています。富山県域発見例の最東端に位置するこの古墳群は古墳時代後期のこの地に、強力な勢力のあったことを物語るものとして注目を集めています。しかしながらその内容は明確ではなく調査の必要性が高まりました。

上市町教育委員会ではこの古墳群が正しく理解され、後世に残されるよう、その基本資料の整備のため富山大学人文学部考古学研究室に依頼して測量調査を実施致しました。

その結果、古墳時代前期の前方後円墳を含む古墳群である可能性が出てきました。今後この結果をもとにさらに研究が進められ古墳時代の上市町の姿をひいては越中の姿を物語るよすがとなることを期待致します。

いまここに報告書を発刊するにあたり、測量調査及び報告書作成に際し種々のご指導、ご助言、ご協力をいただきました関係各位に深く感謝の意を表するとともに、本書が研究者ならびに地域文化発展の一助となれば望外のよろこびであります。

1993年3月

上 市 町 教 育 委 員 会

## 例　　言

- 1 本書は富山県上市町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室が1991年3月、1992年3月に実施した上市町柿沢字観音堂に所在する柿沢古墳群の測量調査報告である。
- 2 調査にあたっては、上市町教育委員会が富山大学人文学部考古学研究室に依託して町職員と協力しておこなった。
- 3 測量原図の整理・製図は、調査参加者全員が協力しておこなった。
- 4 本文は、宇野隆大・前川要（富山大学人文学部助教授）、亀井聰・高橋浩二（富山大学人文学部大学院生考古学専攻）と高慶孝（上市町教育委員会生涯学習課主任）が分担して執筆し、宇野・高慶が記述内容の統一をはかった。なお執筆の分担は目次に記し、必要な場合には文末に付した。
- 5 参考文献は本文末にまとめ、通し番号を付した。本文中のルビ数字は、この参考文献番号である。
- 6 編集は、宇野・前川・高慶が協力しておこなった。
- 7 本古墳群は、1981年（昭和56年）に藤田富士夫氏によって発見され、発表されたもの（1982年）であり、測量調査は、その成果をもとに行なったものである。同氏の地道な調査の上に本報告がなったことを記し、その労苦に敬意を表し感謝する次第である。
- 8 藤田氏の確認された古墳は、19基あるが、本報告では、前方後円ないしは前方後方墳として認知したものがあり、1号から7号墳は、氏のいう古墳名とは、一致していない。
- 9 古墳は、この他に10基あるが、いまだ調査に着手していない。今後、年次的に調査の予定である。

## 目 次

	頁
第1章 上市町の歴史及び地理的環境 .....	高慶 孝..... 1
第2章 調査概要 .....	高慶 孝..... 4
第3章 測量調査結果 .....	宇野隆夫・前川 要・龜井 聰・高橋浩二..... 6
第4章 考 察.....	13
1 古 墳 .....	龜井 聰・高橋浩二..... 13
2 集 落 .....	高慶 孝..... 32
3 結 び .....	高慶 孝・宇野隆夫・前川 要・龜井 聰・高橋浩二..... 34

## 図 版 目 次

	関連頁
図版 1 調査地域航空写真(1) .....	1 ~ 3
図版 2 調査地域航空写真(2) .....	1 ~ 3
図版 3 柿沢古墳群写真(1)	
1 柿沢古墳群遠景 .....	1 ~ 3
2 柿沢第1号墳の墳丘 .....	6 ~ 7
図版 4 柿沢古墳群写真(2)	
1 柿沢第1号墳の墳丘 .....	6 ~ 7
2 柿沢第1号墳の突出部 .....	6 ~ 7
図版 5 柿沢古墳群写真(3)	
1 柿沢第2号墳の墳丘 .....	7 ~ 8
2 柿沢第2号墳の突出部 .....	7 ~ 8
図版 6 柿沢古墳群写真(4)	
1 柿沢第3号墳の墳丘裾と突出部 .....	8
2 柿沢第4号墳の墳丘 .....	9
図版 7 柿沢古墳群写真(5)	
1 柿沢第5号墳の墳丘 .....	9 ~ 10

2 柿沢第6号墳の後方部	10・11
図版8 柿沢古墳群写真(6)	
1 柿沢第6号墳の前方部	10・11
2 柿沢第7号墳の墳丘	11・12
図版9 柿沢古墳群配置図	6～12
図版10 柿沢古墳群測量図1(第1～3号墳)	6～8
図版11 柿沢古墳群測量図2(第4～7号墳)	9～12

## 插 図 目 次

	頁
第1図 柿沢古墳群の位置と周辺の遺跡	2
第2図 越中における古墳出現期墳墓の分布	14
第3図 柿沢古墳群各墳墓の比高差の比較	16
第4図 越中における古墳出現期墳墓の編年	18
第5図 古墳時代前期の前方後円・後方墳の墳丘規模(全国)	22
第6図 古墳時代前期の円・方墳の墳丘規模(全国)	23
第7図 庄内式期とそれ以前の墳墓の墳丘規模(越中)	24
第8図 古墳時代前期の前方後円・後方墳の墳丘規模(越中)	25
第9図 庄内式期とそれ以前の墳墓の墳丘規模(北陸)	26
第10図 古墳時代前期の前方後円・後方墳の墳丘規模(北陸)	27
第11図 古墳時代中期以降の前方後円・前方後方墳の墳丘規模(北陸)	28
第12図 庄内式期とそれ以前の墳墓の墳丘規模(方形周溝墓・前方後方形墳墓, 畦内)	30
第13図 古墳時代前期の前方後円・前方後方墳の墳丘規模(畿内)	31

## 表 目 次

	頁
第1表 富山県内の前期古墳の集成	23

## 第1章 上市町の歴史及び地理的環境

上市町は富山県の中央部に位置し、面積は、237km<sup>2</sup>を測る。町の西北部は県都、富山市と接し、北部は滑川市、南部は立山町にそれぞれ接する。地勢は、東・南部が、剣岳を主峰とする北アルプスの山々であり、山岳地形を形成している。中央部がここから続く山地もしくは丘陵で、西・南部が平野部である。

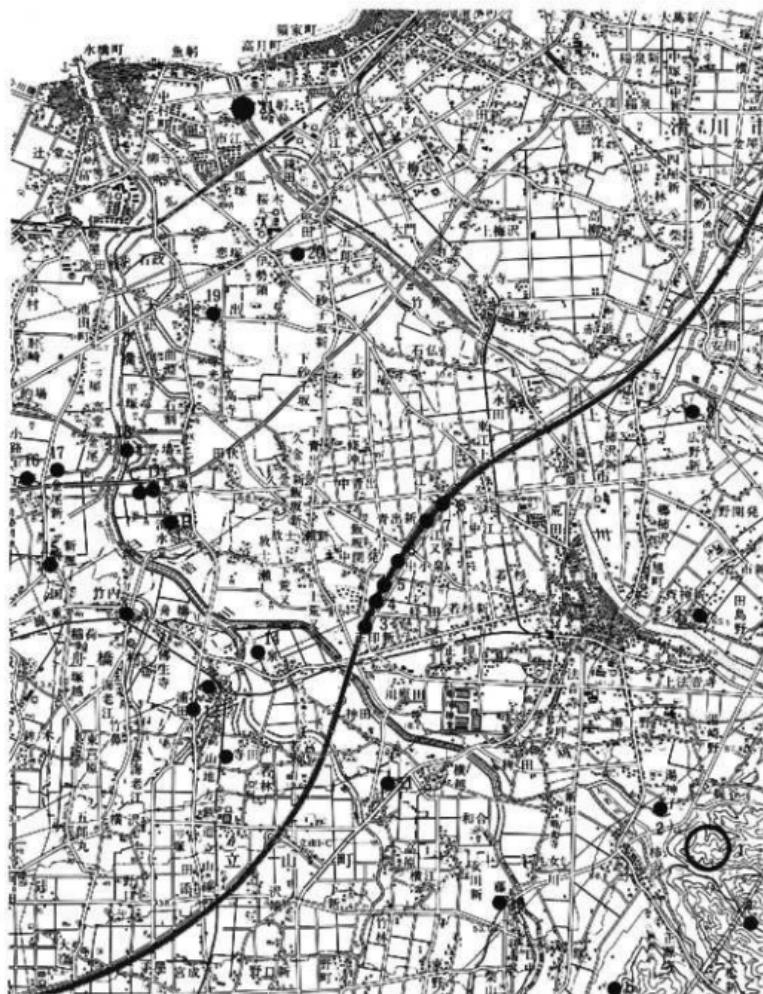
平野部には、北アルプスに源を発する、上市川、白岩川、大岩川が流れ込む。町の最高位、剣岳の標高は2998m、町の最低位は、約10mで、比高差約2,988mである。この間の直線距離は約20kmと非常に短く、急峻な地形である。この結果、河川は急流となり、近年にいたるまで、幾度となく氾濫をくりかえしている。しかしながら、中流域は勾配が緩く、河川の堆積作用から富山市の水橋地区一帯を含む広大な複合扇状地を形成した。これらの扇状地は、古来から水稻耕作に適した地域として開けており、水量豊富な河川を介した水上交通も発達した。1979年に立山町・上市町の沖積地において北陸自動車道建設に先立つ緊急発掘調査が実施された。この一連の調査で、人々の営みが繩文・弥生・古墳・古代・中世と連続として続いており、上市川・白岩川の流域が比較的早い段階から生活の場として利用されていたことが確認された。その後も何等かの理由で場所を少しづつ移動させながらもこの流域が生活の基盤となっており、周辺の集落から生産される物資が、三日市、上市といった市を発達させ今日の上市町の起源となっている。

古代に於いては、山岳仏教の拠点の一つともなっていたようで、真言密宗の本山、大岩山日石寺が奈良時代から今日まで続いているほか、芦辺寺道を介して立山山岳信仰とも結び付いていたといわれる。古代に於ける生産遺跡、堤谷窯跡群（上市町）、亀谷窯跡群（上市町）、中山王窯跡群（上市町）上末窯跡群（立山町）は、この沿線に営まれており、古墳時代末期から平安時代に至る時期に、この地区一帯に強力な勢力があったことをうかがわせる。

柿沢古墳群は、上市町の南東部柿沢地区の通称銀音堂と呼ばれる地域に所在する。ここは、平野に舌状に突出した山地の突端部で、最も標高の高い7号墳で約130mを測る。前記の堤谷窯跡群、亀谷窯跡群、中山王窯跡群は、古墳群を中心として半径1.5km以内に全て集中している。1～7号墳の墳頂からは、北西に新川平野が、さらにその先に富山湾が遠望できる。

上市町内には柿沢古墳群の北2.5kmに後期古墳の斎神新古墳群があるほか、北に近接して堤谷古墳も存在したが、現在は、消滅している。

新川平野全体に目を転ずると白岩川流域に竹内天神堂古墳（舟橋村）、宮塚古墳（富山市水



第1図 柿沢古墳群の位置と周辺の遺跡

1 柿沢古墳群、2 湯神子A遺跡、3 正印新遺跡、4 下経田遺跡、5 中小泉遺跡、6 舶坂遺跡、7 江上A遺跡、8 江上B遺跡、9 本江広野新遺跡、10 日中源兵衛遺跡、11 辻遺跡、12 浦田西反遺跡、13 浦田遺跡、14 犬下段、15 新堀遺跡、16 中野遺跡、17 金尾新遺跡、18 金尾遺跡、19 小山遺跡、20 小池遺跡、21 魚駒遺跡、A 竹内天神堂古墳、B 清水堂古墳、C 宮塚古墳、E 斉神新古墳群、a 龜谷窓跡、b 中山王窓跡群

(S = 1 / 50000)

橋)、若王塚古墳(富山市水橋)、清水堂古墳(富山市水橋)など、平野部では珍しい古墳群が形成されている。これは、県東部の主な沖積地を形成した常願寺川・早月川・片貝川・黒部川などの大河川の流域に較べて上市川・白岩川流域が比較的安定した扇状地であった事を物語るものであり、上市町が1992年に実施した分布調査でも弥生時代から中世までの遺跡が新たに19遺跡発見されるなど今後も新発見の遺跡が確認される可能性が高い。

## 第2章 調査概要

### 1 調査の目的

上市町に人々の営みが確認できる最も古い時期は、今から約18,000年前、上市川左岸の河岸段丘、眼下新丸山遺跡においてである。以後、旧石器（先土器）・縄文時代は、この上市川左右両岸の段丘上、弥生時代は、上市川、白岩川をはじめとする河川により形成された扇状地、もしくは、それに面する段丘上となるのだが、江上遺跡など北陸でも有数の大遺跡を残した弥生時代後期の人々が（あるいは勢力が）古墳時代以降どこで消えたのかが大きな問題として残されている。このような状況のなか、1981年（昭和56年）藤田富士夫氏によって柿沢地区觀音堂地内に柿沢古墳群がはじめて確認された。<sup>35</sup> 藤田氏は、この古墳群を、古墳時代後期の群集墳と考えられており、上市町を中心とする中新川に強力な勢力があったと考えられた。

その後、周辺地域でリゾート開発などの計画が策定されるなど、史跡や遺跡の保全を行う必要性が日増しに増大してきた。

上市町教育委員会では町内で最も大規模な古墳群であり、県域発見例の最東端に位置するこの古墳群の基本的な調査を実施し、古墳時代の上市町の姿を理解するための調査の手始めとして古墳群の測量調査を実施することとした。

### 2 調査に至る経過

調査は富山大学人文学部考古学研究室に上市町教育委員会が依頼し、協議の結果平成2年度、平成3年度の2ヶ年で実施することとし、上市町が依託して実施することとした。

調査期間は、第1期、平成3年3月18日から3月30日までの延べ7日間、第2期、平成4年3月23日から28日までの延べ6日間であった。

調査は、百分の一で等高線25cmで行い各墳丘ごとに行ったが、関連のある古墳は整合性をもたせて測量した。古墳は、19基の円墳からなる群集墳であると考えられているが今回までの調査で突出部つきの円墳ないしは突出部つき方墳と考えられる4基と前方後円墳ないしは前方後円墳と考えられる3基を測量した。その他にも尾根筋で円墳と考えられるものも確認されるが、今回は調査していない。今後、ふたたび年次的に調査する考えである。

調査体制はつぎのとおりである。

### 上市町柿沢古墳群測量調査会

会長	中村 一夫	上市町教育委員会教育長
総括	荒川 武夫	上市町教育委員会生涯学習課長（第1期・第2期）
	神谷 育雄	上市町教育委員会生涯学習課長（平成4年度報告書作成年度）
調査員	宇野 隆夫	富山大学人文学部助教授（調査主任）
	前川 要	富山大学人文学部助教授（調査主任）
	高慶 孝	上市町教育委員会生涯学習課主任
調査補助員	（第1期、1～3号墳測量）	
	田中 道子	春日 真実
	越前 廉祐	柿田 祐司
	亀井 聰	
	瀬戸 智子	葛山 拓也
	野村 純一	向山 静子
	谷杉 延子	
	樺木 和代	高橋 浩二
	河合 君近	角田 隆志
	鈴木 和子	
	浜木さおり	片岡 英子
	森田知香子	宮沢 京子
	（第2期、4～7号墳測量）	
	亀井 聰	高橋 浩二
	河合 君近	角田 隆志
	鈴木 和子	
	浜木さおり	片岡 英子
	森田知香子	宮沢 京子
	中村 大介	
	長谷川幸志	宮田 明
	小野木 学	榎原 激高
	大野 淳也	
	野川 裕二	松山 温代
	松田 留美	大知 正枝
	島崎 久恵	
	海道 順子	柳沼 弥生
	（以上富山大学人文学部考古学研究室学生）	
事務局	三輪 春澄	上市町教育委員会生涯学習課副主幹学習振興係長
	高慶 孝	上市町教育委員会生涯学習課学習振興係主任

調査終了後、模型ヘリコプターによる航空写真撮影を行った。また、測量原点は各墳丘上に残し、今後の調査のめやすとした。

なお、調査期間を通じて、地元地権者代表 西田 勇、上市町農林課課長代理 山田隆夫、同技師 中村政一・金盛敬司の諸氏、立山町教育委員会 瀬戸智子氏、株式会社コンサルタント、城郭跡の確認を行っていただいた高岡 徹氏をはじめとして地元の多くの方々にお世話をいただいた。この場で厚く御礼申し上げる次第である。

## 第3章 測量調査結果

測量調査においては、等高線と地形の傾斜転換ラインを観察・記録して、古墳の形状と規模を確認する努力を行なった。測量調査という性格から完璧な復元は難しいが、調査結果から、最も蓋然性が高いと考えた各古墳の墳丘形態と規模とについて記そう。なお第5～7号墳は前期古墳と推定するものであるが、第1～4号墳は弥生時代末の墳墓である可能性の高いものである。ただし発掘調査による確認を経ていないため、ここではこの点を断った上で、柿沢古墳群として一括して記述しよう。なお墳墓は墳丘をもつ墓の意味であり、弥生・古墳時代を通しての用語として使用する。

各測基準点の標高は、柿沢古墳群の北西に所在する湯神子37.14mから計測し、水平距離は光波測距儀で計測した。これらの結果をもとに、百分の一で等高線25cm間隔の平板測量図を作成した。なお古墳が立地する丘陵の膝下の平野の標高は、約50mである。

### (1) 第1号墳(図版3・4・10)

第1号墳は椿円状の円丘部に短い突出部がつく墳墓である。東西にのびる尾根上に位置し、突出部を西北西に向いている。墳丘主軸は尾根筋に平行し、磁北から西に60°40'振っている。平野へは突出部前面から円丘部北側側面にかけてが面する。円丘部後方の東側には、標高100m～100.75mにかけてコンターラインの屈曲が見られ、ここに周溝が巡ると考えられる。おそらく尾根を截ち切る形で墳丘を作り出しているのであろう。また墳丘は円丘部において樹木根の影響や封土の流出などがみられるが、遺存状態は比較的良好である。

円丘部は自然地形を利用し、尾根幅いっぱいに築造している。円丘部裾の傾斜変換のラインは等高線をまたいで巡り、円丘部北側では崖線のライン、東側は周溝部、南側は98mの等高線、西側は99mの等高線を採用した。その結果、円丘部長約13.5m、円丘部幅約15.0mと復元できた。また円丘部最高点の標高と円丘部裾標高の平均値から、円丘部高さは2.619mと復元した。円丘部上面には、長さ7m、幅5.5mの平坦面がある。なお裾の傾斜変換ラインから円丘と判断しているが、方丘であった可能性も留保しておきたい。

突出部は尾根上を利用し、ゆるやかに傾斜する平坦面を造り出している。突出部前面は97.5mの等高線を採用し、突出部長約7.5m、突出部幅約6.0m、くびれ部幅約7.0mという結果を得た。また突出部最高点の標高と、突出部裾標高の平均値から、突出部高さは0.925mと、復元できた。

なお円丘部最高点と突出部最高点との比高は 2.069mを測る。突出部前面の等高線からみて、前面を浅い溝で画されていた可能性もあるであろう。

以下に第1号墳の復元結果を再掲しておく。

墳 形：突出部つき円墳	円丘部高さ：2.619m
全 長：21.0m	突出部高さ：0.925m
円丘部長：13.5m	くびれ部高さ：0.250m
円丘部幅：15.0m	最高点と最低点比高：3.669m
突出部長：7.5m	円丘頂と突出頂比高：2.069m
突出部幅：6.0m	最高点標高：101.069m
くびれ部幅：7.0m	

## (2) 第2号墳(図版5・10)

第2号墳は隅丸正方形状に近い円丘に短い突出部がつく墳墓であり、第1～4号墳の小グループ中で最大規模を有する。東西にのびる尾根上に位置し、突出部を北西に向いている。墳丘主軸は尾根筋に平行し、磁北から西に50° 85° 振っている。平野へは突出部前面が面する。円丘部東側には標高109.75m～111.25mにかけてコンターラインの屈曲が見られ、ここに第3号墳と共有する周溝が巡ると考えられる。また墳丘は円丘部南東側で封土の流出などが見られるが、遺存状態は比較的良好である。

円丘部は自然地形を利用して、尾根上をいっぱいに築造している。円丘部据の傾斜変換のラインは等高線をまたいで巡り、円丘部西側では崖線のライン、北側は108m～108.25mの等高線、東側は3号墳と共有する周溝部、南側は108.250mの等高線を採用した。その結果、円丘部長約18.0m、円丘部幅約19.5mと復元できた。また円丘部最高点の標高と円丘部据標高の平均値から、円丘部高さは4.018mと復元できた。

突出部は尾根上を利用し、緩やかに傾斜する平坦面を造り出している。突出部前面は105.5mの等高線、側面はそれぞれ崖線のラインを採用した。その結果、突出部長約8.0m、突出部幅約11.0m、くびれ部幅約7.5mと復元できた。また突出部最高点の標高と突出部据標高の平均値から、突出部高さは1.062mと復元できた。なお円丘部最高点と突出部最高点との比高は、4.343mを測る。

以下に第2号墳の復元結果を再掲しておく。

墳形：突出部つき円墳	円丘部高さ：4.018m
全長：26.0m	突出部高さ：1.062m
円丘部長：18.0m	くびれ部高さ：(0.500m)
円丘部幅：19.5m	最高点と最低点比高：6.643m
突出部長：8.0m	円丘頂と突出頂比高：4.343m
突出部幅：11.0m	最高点標高：112.243m
くびれ部幅：7.5m	

### (3) 第3号墳 (図版6・10)

第3号墳は椭円状の円丘に長い突出部がつく墳墓である。東西にのびる尾根上に位置し、突出部を北西に向けている。墳丘主軸は尾根筋に斜行し、磁北から西に40° 00' 振っている。平野へは突出部前面が面する。また墳丘は円丘部南側で封土の流出がみられるが、遺存状態は比較的良好である。

円丘部は自然地形を利用し、尾根幅いっぱいに築造している。円丘部裾の傾斜変換のラインは等高線をまたいで巡り、円丘部西側では2号墳と共有する周溝部、北東側は崖線のラインを採用し、崖で削られた南側は推定復元した。その結果、円丘部長約12.0m、円丘部幅約16.0mと復元できた。また円丘部最高点の標高と円丘部裾標高の平均値から、円丘部高さは2.987mと復元できた。

突出部は尾根上を利用して、ゆるやかに傾斜する平坦面を造り出している。突出部前面と側面はそれぞれ崖線のラインを採用した。その結果、突出部長約6.0m、突出部幅約8.0m、くびれ部幅約9.0という結果を得た。また突出部最高点の標高と突出部裾標高の平均値から、突出部高さは1.600mと復元できた。なお円丘部最高点と突出部最高点との比高は3.587mを測る。

以下に第3号墳の復元結果を再掲しておく。

墳形：突出部つき円墳	円丘部高さ：2.987m
全長：18.0m	突出部高さ：1.600m
円丘部長：12.0m	くびれ部高さ：0.850m
円丘部幅：16.0m	最高点と最低点比高：5.987m
突出部長：6.0m	円丘頂と突出頂比高：3.587m
突出部幅：8.0m	最高点標高：113.287m
くびれ部幅：9.0m	

#### (4) 第4号墳(図版6・11)

第4号墳は楕円状の円墳に短い突出部がつく墳墓である。東西にのびる尾根と北東から西南へとのびる尾根の連接部に位置し、突出部を北西に向いている。墳丘主軸は東西にのびる尾根筋に平行し、磁北から $60^{\circ} 80'$ 振っている。平野へは突出部前面が面する。また墳丘は円丘部南西側で封土の流出が見られるが、遺存状態は比較的良好である。

円丘部は自然地形を利用し、尾根幅いっぱいに築造している。円丘部裾の傾斜変換のラインは等高線をまたいで巡り、円丘部北・南側では117.25mの等高線、東側では118.75m～118.50mの傾斜変換点を採用し、西側は推定した。その結果、円丘部長約16.6m、円丘部幅約13.6mと復元できた。また円丘部最高点の標高と円丘部裾標高の平均値から、円丘部高さは2.599mと復元できた。

突出部は尾根上を利用して、緩やかに傾斜する平坦面を造り出している。突出部前面は117mの等高線を採用した。その結果、突出部長約2.6m、突出部幅約3.2m、くびれ部幅約3.1mと復元できた。また突出部最高点の標高と突出部裾標高の平均値から、突出部高さは0.537mと復元できた。なお円丘部最高点と突出部最高点との比高は2.424mを測る。

以下に第4号墳の復元結果を総括しておく。

墳形：突出部つき円墳	円丘部高さ：2.599m
全長：19.2m	突出部高さ：0.537m
円丘部長：16.6m	くびれ部高さ：0.400
円丘部幅：13.6m	最高点と最低点比高：3.224m
突出部長：2.6m	円丘頂と突出頂比高：2.424m
突出部幅：3.2m	最高点標高：120.124m
くびれ部幅：3.1m	

#### (5) 第5号墳(図版7・11)

第5号墳は、北北西にのびる尾根上に位置し、主軸を尾根筋に平行させた前方後方墳である。墳丘主軸は磁北から東に $19^{\circ} 50'$ 振っている。

墳丘は狭い尾根幅をいっぱいに利用して築造しており、前方部前面裾と後方部前面裾の標高差が大きい。後円部は主軸方向にやや長い楕円形を呈し、墳丘裾のラインの確認は、やや困難である。しかし、墳丘内で等高線がやや詰っているとみられ、西側斜面では118.25mの等高線が墳丘裾のラインと推定される。墳丘裾のラインは等高線をまたいで形成されており、南側の尾根上では緩やかな傾斜変換点を通り、東側斜面では119.25mの等高線が墳丘裾のラインにな

ると推測される。後方部墳丘裾のラインは、前方部裾ではなく、前方部上面の平坦面コーナーに至る。以上から、後方部長さは12.5m、後方部幅は10.6m、また後方部最高点と後方部裾標高の平均値とから、後方部高さは約2.1mという結果を得た。

くびれ部は平野に面した西側斜面では117.5mの等高線が下端を形成すると考えられるが、東側は樹木の抜き跡によって崩れていることもあるが、明確な下端を確認できない。ここでは当初から、東側は明確な裾を作り出す意図がなかった可能性が高いであろう。従って、くびれ部幅は不明であり、西側裾標高と最高点から、くびれ部高さは1.8mと復原した。

前方部において墳丘裾のラインと各コーナーの位置を確認することはかなり困難である。しかし、北方コーナーは傾斜変換点があり、116.750mの等高線が前方部前面裾のラインを形成すると考えられる。東側斜面は等高線が全て斜面に逃げて行くため、墳丘裾のラインは確認できない。これらは平野からの見通しを中心に築造が行なうために、西側側面を東側にくらべて丁寧に成形した結果によるものと考えたい。以上から、前方部長さは9.9m、前方部幅は7.8m、前方部高さは約2.1mという結果を得た。

以下に5号墳墳丘の復原結果を総括しておく。

墳形：前方後方墳	後方部高さ：2.067m
全長：22.4m	前方部高さ：2.050m
後方部長：12.5m	くびれ部高さ：1.800m
後方部幅：10.6m	最高点と最低点比高：4.773m
前方部長：9.9m	後方頂と前方頂比高：2.073m
前方部幅：7.8m	最高点標高：121.373m

#### (6) 第6号墳(図版7・8・11)

第6号墳は5号墳と同じ尾根上の高い地点に位置し、主軸を尾根筋に平行させた前方後円墳である。墳丘主軸は磁北から東に17°50'振っている。

6号墳と5号墳との間は約0.4mと狭く、また5号墳後方裾と6号墳前面裾の標高はほぼ同じである。5号墳と同じく尾根幅をいっぱいに利用し、西側側面を丁寧に成形している。また、墳丘裾のラインも等高線と一致していない。

後方部はかなり崩れているため、墳丘の等高線と尾根との等高線の区別がかなり難しい。尾根上である後方部南側についてのみ、墳丘と尾根との傾斜変換点から裾の位置が確認できるだけである。東側斜面は等高線をまたいで裾のラインが形成されていたと推測されるが、西側斜面はわずかに122,000mの等高線が広がる傾向をみせているため、後方部裾のラインの一部を

形成していたものと推定する。以上から、後方部長さは13.2m、後方部幅は推定で10.7mという結果を得た。復原では後方部裾のラインは長方形に近く成形され、平坦面のラインも裾のラインと相似形でしっかりと造られていたものと考えられる。

くびれ部は西側斜面の遺存状態がやや良好であり、121.250mの等高線がくびれ部の下端と前方部裾のラインを形成している。東側斜面はやや崩れており、122.000mの等高線がくびれ部の下端を示しているものと推測する。以上から、くびれ部幅は約4.5mに復原される。

前方部も西側側面が比較的良好に残っている。121.250mの等高線がくびれ部から前方部東側のコーナーまでの裾のラインにほぼ一致するものと考えられる。東側側面は5号墳と同じく、裾のラインが等高線をまたいで形成されており、明らかに西側側面を意識して成形されたものであろう。前方部平坦面は5号墳に比べてやや平坦に整えられている。以上から、前方部長さは8.6m、前方部幅は6.2mという結果を得た。

以下に第6号墳墳丘の復原結果を再掲しておく。

墳 形：前方後方墳	後方部高さ：1.426m
全 長：21.8m	前方部高さ：1.350m
後方部長：13.2m	くびれ部高さ：1.350m
後方部幅：9.6m	最高点と最低点比高：2.064m
前方部長：8.6m	後方頂と前方頂比高：0.714m
前方部幅：6.2m	最高点標高：123.314m

#### (7) 第7号墳（図版8・11）

第7号墳は墳丘の遺存状態が良好であり、現状は古墳築造時の形状をかなり留めていると思われる。ここでは遺存状態が特に良好な後円部北側斜面とくびれ部南側斜面、前方部南側斜面を軸として墳丘の復原を試みた。当古墳は尾根の頂部に位置し、柿沢古墳群の中で最高所にある前方後円墳である。方位については前方部を北西に向け、主軸は磁北から西に約55° 00' 振っている。平野には前方部前面が面するが、見通しはよくない。

後円部は東西に径がやや大きい椭円形のように見えるが、これは北側からの視覚を強調するために大きく張り出した結果によるものと考えたい。復原の形態としてはほぼ正円形を考えている。後円部の北東から東にかけての裾ラインは、その傾斜変換点から126mの等高線が、くびれ部に接続するものと考えられる。以上から、後円部の直径は19.4m、また後円部最高点とその裾標高の平均値から後円部高さは約3.7mという結果を得た。後円部には段築成や葺石は行なっていないと考えて良い。なお、後円部平坦面はやや前方部に寄り気味であり、129mの

等高線がほぼその範囲を示しているものと思われる。平坦面の直径は5.3mと復原した。

くびれ部は遺存状態が比較的良好な南側斜面を参考にし、126mの等高線をくびれ部下端とした。北側は傾斜が急であり、現地においてくびれ部の下端を確認することは困難であると考えられた。しかし、わずかながら等高線の周り具合と間に変化が見られることから127mの等高線を北側の下端と推定した。以上から、くびれ部幅は約11.4mと推定し、くびれ部標高の平均値とくびれ部最高点から、くびれ部高さを約2.3mと復原した。

前方部は西方コーナーの裾位置が比較的確認しやすく、124.50mの等高線が前方部裾のラインを形成するものと考えられる。前方部前面は同等高線より下に向かって傾斜が急になる。北方コーナーも同じ等高線を裾とする。そこでくびれ部との接続であるが、比較的遺存状態の良好な南側斜面をみると、127.50mの等高線を自然に延長すると、くびれ部に接続することから、撥形の前方部を復原した。同様な裾のラインで北側斜面も復原することが可能であると推測される。以上から、前方部長さは14.0m、前方部幅は14.0mという結果を得た。また前方部最高点の標高と、前方部裾標高の平均値とから、前方部高さは約2.9mと復原した。前方部にも段築成や葺石の痕跡はみられない。なお後円部最高点と前方部最高点の比高差は約1mである。

南側に比べて北側の側面を急勾配に形成し、堂々とした姿を呈していることから、北側には参列者などの通る道のようなものがあったのではないかと推測される。

以下に7号墳墳丘の復原結果を再掲しておく。

墳 形：前方後円墳	後円部高さ：3.684m
全 長：33.4m	前方部高さ：2.987m
後円部長：19.4m	くびれ部高さ：2.300m
後円部幅：(19.4m)	最高点と最低点比高：5.184m
前方部長：14.0m	後円頂と前方頂比高：0.972m
前方部幅：14.0m	最高点標高：129.884m
くびれ部幅：11.4m	

## 第4章 考察

### 1 古墳

前章までにおいて、柿沢第1～7号墳の測量調査の成果を示した。その結果、越中東部の新川郡地区に弥生時代末～古墳時代前期の墳墓・古墳が存在した可能性がかなり高いものとなつた。また、その各墳墓の墳丘形態の特徴と変遷を推測し得るようになってきた。従来、越中西部ではかなりの古墳が存在することが判明していたが、越中の東半分を占める新川郡では、当期の明確な古墳が、ほとんど確認されていなかった。そのため本調査例は、日本海側における古墳を考える上でかなり重要な位置を占めると考えられる。

ここでは、これら柿沢第1～7号墳の編年を試みて後に、越中という地域の中において位置づけ、さらには古墳出現期の政治・社会的体制の中で評価する試みを行ないたい。勿論、発掘調査を実施していないという制約はあるが、出来る限りの考察を加えて、将来における当古墳群の保全と、より詳細な調査がなされることの一助としたい。

#### (a) 柿沢古墳群の編年

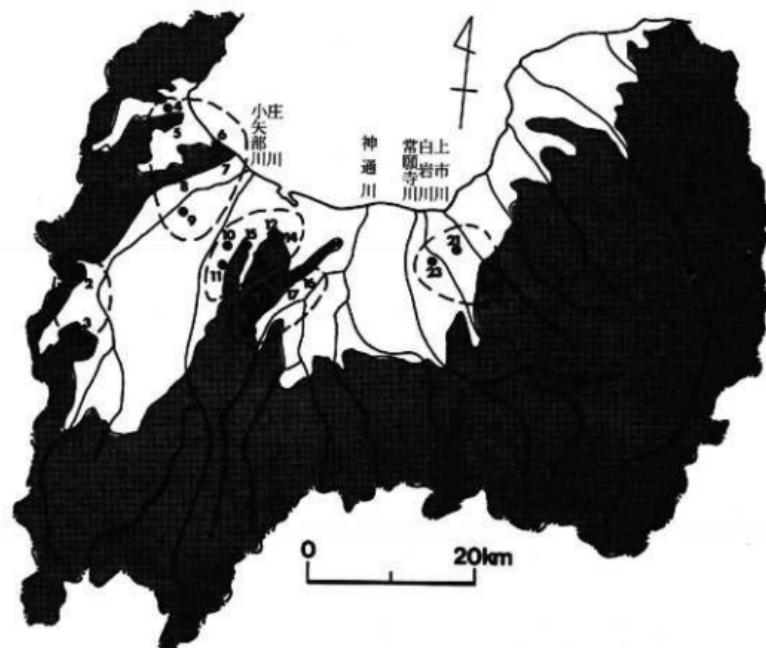
ここで、あらためて柿沢第1～7号墳の各墳墓の特徴を整理し、その築造順序を推定しておきたい。

共通点としては、まず全ての墳墓が前方部あるいは突出部をもつことが挙げられる。同時に、前方部や突出部の形状と円丘・方丘部への取りつき方、また円丘・方丘部の形状、前方部と後円・後方部の比高についてみると、明確な相違点が存在する。

第1～4号墳の突出部は短小であり、その上面は前方に向って緩やかに低くなっていくものである。また尾根平坦面との境は、それほど明確ではなく、地形を注意深く観察しなければ、見過ごしてしまう程度のものである。おそらくは、円丘部への入口としての性格をもつものであろう。

これに対して、第5・6号墳の前方部は、明確な頂部の平坦面と裾のラインをもつものであり、前方部と判断し得るものである。ただし、前方部裾のラインが後方部裾のラインに、つながらないという特徴をもっている。ただし、第6号墳では、平野に面した側については、前方部裾と後方部裾のラインがつながり、より整った形をなしている。これらの前方部は、長さは、平面形が明確な形にならず、やや細身であることに特徴がある。

第7号墳の前方部は橢形であり、後円部に匹敵するほどの大きさをもつ。そして前方部から



第2図 越中における古墳出現期墳墓の分布

- 1. 谷内墳墓群、谷内16号墳
- 2. 関野1号墳
- 3. 平桜川東遺跡
- 4. 中村天場山古墳
- 5. 朝日洞山1号墳
- 6. 桜谷1・2号墳
- 7. 東上野1号墳群
- 8. 板谷古墳
- 9. 石塚2号墳
- 10. 布目沢北遺跡
- 11. 串田新遺跡
- 12. 四山遺跡
- 13. 南太閤山1号墳
- 14. 一ツ山1・2号墳墓
- 15. 五分一古墳
- 16. 吾羽山丘陵No.16・18号墳
- 17. 杉谷4号墳墓、杉谷A遺跡
- 18. 王塚古墳
- 19. 勅使塚古墳
- 20. 鐘撞堂墳墓
- 21. 飯坂遺跡
- 22. 椹沢古墳群
- 23. 竹内天神堂古墳

後円部にかけての裾のラインも墳丘を全周するものである。第7号墳の前方部は、完成・定型化した段階のものと考えてよいであろう。

次に、円丘・方丘部の形状についてみると、第1～4号墳では、左右対象であるものの、かなり不整の円形の形態をとる。これに対して第5・6号墳の後方部は、尾根崖側の裾が明確ではないが、かなり整った長方形と考えられる。第7号墳の後円部は、わずかにゆがみがあるものの、ほぼ正円である。

最後に、円丘・後方・後円部の後方中央裾と前方部・突出部の前方中央裾の標高差についてみよう(第3図)。第1～4号墳では、これが2mをかなり越え、特に第2号墳では4m以上と非常に大きい。それに対して、第5・6号墳では2m前後であり、この中では6号墳が、より標高差が小さい。第7号墳では、これが1m以下と極端に小さくなる。第7号墳は、尾根という地形の制約があるにもかかわらず、裾の標高を揃えるという強い意図が感じられる。

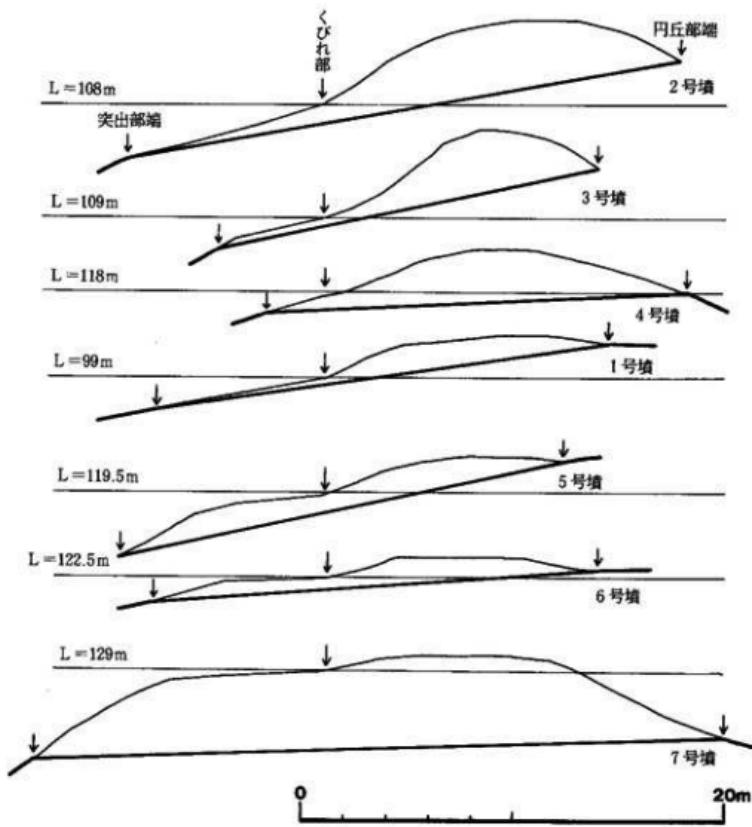
以上の古墳群が一連の造墓の結果、成立したとする推察が許されるならば、標高が最も低く平野に近い第1号墳から、最も高所の第7号墳へという順、あるいはその逆順で築造されたとみてよいであろう。

墳丘上からは、遺物を採集できず、この面からの年代の比定は出来ないが、上記のように、墳丘形態の違いはかなり明確である。全国的な古墳の出現過程を参考にするならば、柿沢古墳群は、第1～4号墳→第5・6号墳→第7号墳の順に築造されたと考えて、まず大過ないと判断したい。

第1～4号墳の最大の特徴は、緩やかに傾斜する短小な突出部が取りつくことである。このような突出部に最も近いものは、前方後方形の墳墓では、京都府芝原原墳墓、石川県小菅波4号墳などがある。これらは、いづれも定型化した古墳の出現以前に特徴的にみられるものであり、畿内庄内式・北陸白江式(漆5・6群土器、庄内式後半並行)に比定できるものである。また前方後円形の墳墓としては、寺沢薰氏が縦向型前方後円墳と評価する石川県分校カシ山1号墳・宿東山1号墳も、墓道的突出部をもつて近いものであろう。これらの築造時期は小菅波4号墳墓に後続するものである。そして、柿沢1～4号墳もこうした墳墓、あるいはさらに奈良県縦向石塚墳墓や千葉県神門5号墳墓、福岡県津古生掛古墳などの、定型化した古墳出現以前に遡る一連の墳墓と何らかの関係をもちつつ成立したものである可能性が高いと推察しておきたい。

なお柿沢第1～4号墳については、後期の古墳群である可能性を、全く否定することは出来ない。ただし突出部の形態や、やや不整形な円丘部は、後期古墳としてはやや異質であり石室を構築した形跡もない。

そして、後述のように柿沢古墳群の膝下の平野部に展開する大集落の江上A遺跡や、湯神子



第3図 柿沢古墳群各墳墓の比高差の比較

遺跡の盛衰との関係からみると、これらは北陸月影式（畿内第V様式末～庄内式古並行）に接点をもちつつ白江式（庄内式新並行）を中心とする時期に築造された可能性が高いと推察しておきたい。

第5・6号墳は前方後方墳として弥生時代的な墳墓様式からは脱却しているものであるが、墳丘裾のラインが等高線をまたいで走り、また墳丘を全周しないなど、出現期の前方後方墳の特徴をもっている。これに最も近いものは、前方後円墳ではあるが、富山県砺波グループの、

谷内16号墳（北陸古府クルビ式、漆7・8群土器、布留0～1式並行）と考えられる。

第7号墳は後円部や前方部の形状からみて、明確に前方後円墳として定型化したものであり、砺波グループの関野1号墳（北陸高扁式、漆9群土器、布留2式並行）と近似する。関野1号墳は、奈良県箸墓古墳の四分の一規模相似墳と復元されているが、柿沢第7号墳の全長は関野1号墳の全長の約二分の一であり、箸墓古墳の八分の一の規模となる。

古墳あるいは古墳時代の定義には、周知のように多くの議論があるが、ここでは、測量調査の結果からではあるが、柿沢第1～4号墳を弥生時代末の墳墓、同5～7号墳は古墳時代前期でも古い段階に属する古墳である可能性が高いと推察しておきたい。この年代比定については、今後の調査によってさらに実証していく必要があるが、このように考えた場合に派生する問題について、以下で予察を加えることとしよう。

(b) 越中における古墳出現期の地域別様相

柿沢古墳群の年代を以上のように推察することが許されたとして、その意味するところを、越中の地域別の動向と対比して検討しよう（第3・4図）。なお、地域区分と古墳編年は、基本的に、岸本雅敏氏の成果に依拠し、柿沢古墳群の調査成果他を付け加えた。

① 砺波グループ

越中西部に位置し、加賀国と境する交通上の要衝である。小矢部川中流域を中心とし、古代の砺波郡に属する。

A 小矢部ブロック

谷内墳墓群、谷内16号墳、関野1号墳の順に築造されたと考えられる。そのうち、谷内16号墳は京都府椿井大塚山古墳の四分の一相似墳で、出土土器から漆町8群（布留1式）墳の築造と考えられる。関野1号墳は奈良県箸墓古墳の四分の一相似墳であり、出土土器から漆町9群（布留2式）の築造と考えられている。

B 小矢部南ブロック

平桜川東遺跡方形周溝墓がある。四隅の1コーナーが切れるタイプのものであり、漆町3～4群（庄内0～1式）の築造と考えられる。

② 水見・高岡グループ

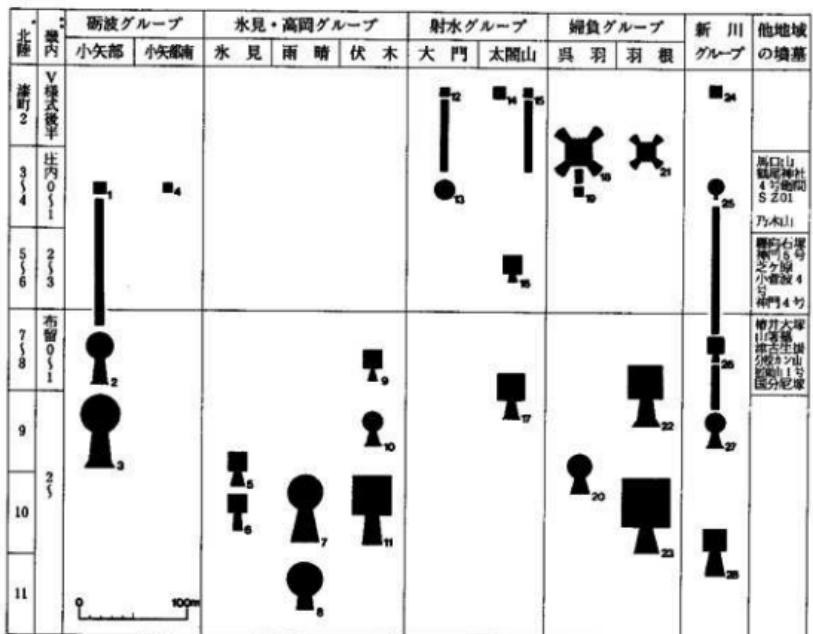
小矢部川・庄川下流域を中心とし、眼前に日本海を控える。古代において越中國府が置かれた射水郡にあたる地区である。

C 水見ブロック

中村天場山古墳、朝日潟山1号墳がある。<sup>22</sup>両墳とも前方後方墳である。

D 雨晴ブロック

桜谷1・2号墳がある。桜谷1号墳は全長約62mの前方後円墳である可能性が高い。また桜



第4図 越中における古墳出現期墳墓の編年  
 ((7)岸本雅敏1992より加筆・修正、\*29 田嶋明人1986、\*\*60 寺沢蔵1986)

1. 谷内墳墓群、2. 谷内16号墳、3. 開野1号墳、4. 平桜川東遺跡、5. 中村天場山古墳、6 朝日渕山1号墳、7. 桜谷1号墳、8. 桜谷2号墳、9. 石塚2号墳、10. 東上野I古墳群1号墳、11. 板屋古墳、12. 布目沢北遺跡、13. 串田新1号墳墓、14. 四山4号墳墓、15. 南太陽山I遺跡、16. 一ツ山1号墳墓、17. 五分一古墳、18. 杉谷4号墳墓、19. 杉谷A遺跡、20. 吾羽山丘陵No.16号古墳、21. 鏊堂山墳墓、22. 塚古墳、23. 勝使塚古墳、24. 鎌板遺跡、25. 柿沢1～4号墳墓、26. 柿沢5・6号墳、27. 柿沢7号墳、28. 竹内天神堂古墳

谷2号墳は帆立貝式古墳である可能性をもち、碧玉製石鏹ほかの遺物から古墳時代前期後葉の築造と考えられる。

## E 伏木ブロック

石塚2号墳<sup>10</sup>、東上野I古墳群1号墳<sup>11</sup>、板谷古墳<sup>12</sup>の順に築造されたと考えられる。石塚2号墳は、前方後方型周溝墓で、隣接する3号墳の出土土器から漆田8群前後の築造と考えられる。東上野I古墳群1号墳は前方部が撥形に開く前方後円墳であり、関野1号墳と並行すると考えられる。

### ③ 射水グループ

越中中央部に位置し、富山県の平野を東西に二分する射水丘陵に営まれた古墳群である。古代には射水郡の一角となる。

#### F 大門ブロック

布目沢北遺跡、串田新遺跡<sup>18</sup>がある。布目沢北遺跡からは多数の方形周溝墓が検出されており、それらは出土土器から塗町2～3群の幅（V様式後半～庄内0式）におさまる。串田新遺跡は5基以上の盛土を持つ墳墓と方形周溝墓から構成されている。うち現存する3基は円丘墓であり、出土土器から塗町3～4群の築造と考えられる。

#### G 太閤山ブロック

圓山遺跡、南太閤山I遺跡、一ツ山1・2号墳<sup>19</sup>、五分一古墳<sup>20</sup>の順に築造されたと考えられる。圓山遺跡は出土土器から、塗町2群前後の築造と考えられる。南太閤山I遺跡は出土土器から、塗町2～3群の年代が与えられる。一ツ山1・2号墳は前方後方形の墳墓で、隣接する集落である三谷遺跡の存続年代から考えて、塗町3～6群の築造と考えられる。五分一古墳は前方部が撥形に開く前方後方墳であり、後述する王塚古墳と並行すると考えられる。

### ④ 婦負グループ

呉羽丘陵～神通川以西を中心とする地域に営まれた古墳群である。古代の婦負郡にあたる地域である。

#### I 呉羽ブロック

杉谷4号墳<sup>21</sup>、杉谷A遺跡、呉羽山丘陵No.16・18号墳<sup>22</sup>がある。杉谷4号墳は四隅突出型墳墓である。杉谷A遺跡は出土土器から、塗町3～4群の築造と考えられる。呉羽山丘陵No.18号墳は四隅突出型墳墓であり、杉谷4号墳と並行またはそれ以前の築造と考えられる。No.16号墳は前方後円墳であり、関野1号墳に並行または後出するものと考えられる。

#### J 羽根ブロック

鐘撞堂墳<sup>23</sup>、王塚古墳、勅使塚古墳の順に築造されたと考えられる。鐘撞堂墳は四隅突出型墳墓で、杉谷4号墳と並行またはそれ以前の築造と考えられる。王塚古墳は箸墓古墳の五分の一相似墳であり、関野1号墳と並行またはそれ以前の築造と考えられる。

### ⑤ 新川グループ

神通川以東～越後国との国境までの地域であり、古代新川郡にあたる。白岩川流域を中心とする地区である。飯坂遺跡<sup>24</sup>、柿沢古墳群<sup>25</sup>、竹内天神堂古墳<sup>26</sup>の順に築造されたと考えられる。飯坂遺跡は出土土器から、塗町2群前後の築造と考えられる。柿沢古墳群は1～4号墳が塗町3～6群、5・6号墳が塗町7～8群、7号墳が塗町9群の築造と考えられる。

これら首長墓の系譜を郡程度の地域ごとに示したが、以下でその動向を整理しておきたい。

畿内第V様式後半に並行すると考えられる漆町2群土器の時期には、射水グループと新川グループで方形周溝墓が築造されるのに対して、婦負グループでは山陰地方の影響を強く受けた墓制である四隅突出型墳墓が採用される。両者の間には規模において大きな格差があるが、いづれにせよ方形を基本とした墳墓であり、この段階では各グループの差は、それほど大きくはないと考えられる。

次に、庄内式に並行すると考えられる漆町3～6群土器の時期には、射水グループの串田新遺跡と新川グループの柿沢古墳群とにおいて、円形を基本とした墳墓が築造されたようである。これらも並行する時期の方形を基本とする墳墓と比べても、規模的にほとんど変わるものではない。それぞれが、色々の系譜下で地方的な造墓を行なった結果であろう。

これまでの時期については、地域毎に墳墓形式に差があるものの、規模については、さほど変わらないものが營まれたことを重視しておきたい。

布留0～1式に並行すると考えられる漆町7～8群土器の時期には、畿内の影響を強く受けた墓制である前方後円墳が、北陸道の越中への入口に位置する砺波グループで築造された。それに対して氷見・高岡グループと射水グループ、婦負グループ、新川グループでは前方後方墳が築造された。ただ氷見・高岡・射水グループという射水郡の地域では、年代を確定できない前方後円墳の中に、この時期の築造である可能性をもつものがある。そして谷内16号墳や王塚古墳が畿内の古墳と相似関係にあると推察できることは、当地域が畿内を頂点とする全国的な政治体制に参入したことを示すであろう。同時に、同様な墳形をもち規模が小さい柿沢5・6号墳や五分一古墳などが各グループに存在するようになった。

この時期の大きな変化は、墳墓形式としては、当時に一般的な前方後方・前方後円墳にまとまるのに対して、少数の前方後円墳と多数の前方後方墳、またそれの中での大小という格差が顕在化して、地域の序列化が進んだと考えられることである。この規模の差については、後論しよう。同時に、各グループの墳墓の規模は、それまでと比べるならば、はるかに大きくなることが多い。当时期には、中央の支配が及んだだけではなく、砺波グループを中心とする地域的な政治体制（地域王権）が確立して、新しい時代に転換したものと想定しておきたい。

布留2式に並行すると考えられる漆町9群土器の時期には、砺波グループで著墓古墳の四分の一規模相似墳であるとされる閑野1号墳が築造される。また、氷見・高岡グループの東上野I古墳群1号墳と新川グループの柿沢7号墳は、閑野1号墳の2分の1相似墳である可能性が高く、首長墓の序列化がさらに整理・画一化されたのではないかと考えられる。また、この時期を前後して砺波グループでは、小矢部市竹倉島遺跡に激しく布留系甕が流入し、土器様式において畿内的な土器組成に一変するというような現象も生じ、前段階よりもさらに強い畿内古墳文化の影響が及んだと考えられる。

古墳時代前期末頃にあたるであろう、次の時期は、一種の再編期であった可能性が高い。当期には砺波グループでの盟主的な前方後円墳の造営は途絶えたようである。また同様に、新川グループでも柿沢古墳群では柿沢7号墳以後の造営を確認できない。そして帰農グループの勤使塚古墳をはじめとして、いくつかの大小の前方後方墳が築造された可能性が高いが、この中で唯一、氷見・高岡グループの桜谷1号墳のみが前方後円墳であると考えられる。桜谷1号墳に近接する2号墳からは碧玉製石鏡も出土していることからみて、この時期以後、射水郡域、とりわけ桜谷古墳群に象徴される雨晴ブロックの勢力が越中の中心となつたと想定してよいであろう。

この時期以後、越中においては、前方後円・後方墳の築造は著しく減少し、前方後円墳、帆立貝式古墳、大型円墳からなる古墳時代中期の体制に転換したと考えられる。

越中においては、発掘調査を実施した前期古墳の例はそれほど多くはない。ただし、いくつかの調査例と、墳丘形態とから、出来る限りの復元的考察を加えた。今後、これらをさらに確実なものとする努力を行なっていきたい。

同時に、以上を総括すると、越中の古墳の動向は当時の全国的な在り方とかなり一致し、特に北陸地域のモデルともなりえる可能性をもつてゐる。そしてここでは、地域色をもちつつも規模としては等質的な墳墓を営んだ段階から、画一的ではあるが規模の格差が顕著な前方後円・後方墳が営まれた段階への転換を、古墳時代の始まりと評価しておきたい。柿沢古墳群においては、第1～4号墳と第5～7号墳の違いがこれに相当し、年代は畿内庄内式と布留式の交の頃にあたる可能性が高いであろう。以後さらにいくつかの再編を経ながら造墓がなされていったと考えられる。

(高橋浩二)

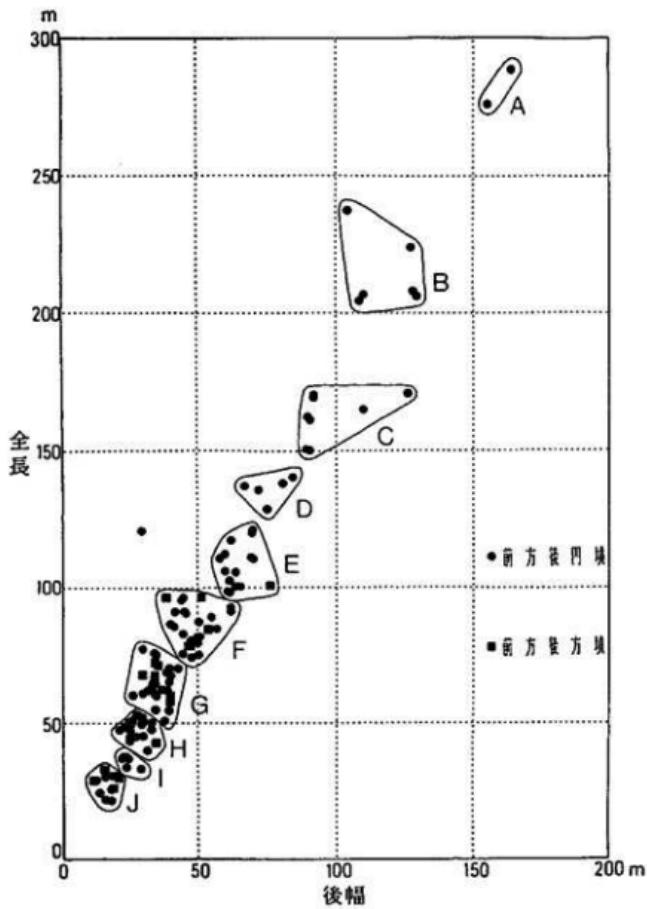
#### (c) 柿沢古墳群の墳丘規模

以上の墳丘形態の分析から、柿沢古墳群が、弥生時代末から古墳時代前期に至るものである可能性が高いことを示した。最後に柿沢古墳群の墳丘規模について、一部はすでに触れたが、北陸や畿内の主要な前期古墳と比較して、その位置づけを試みよう。

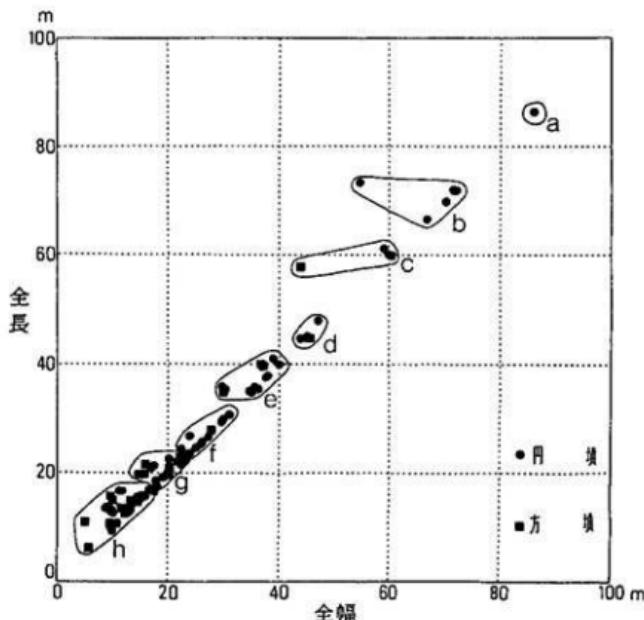
なお古墳時代前期における古墳の墳丘規模については、前方後円・後方墳でA～Iの9つの群、円・方墳ではa～hの8つの群を設定できる(第5・6図)。

前方後円墳を中心とするグループでは、A群は全長300m級、B群は全長200m級、C群は全長170m級、D群は全長125～150m、E群は全長100m級、F群は全長80～100m級、G群は全長50～80m、H群は全長40m級、I群は全長30m級、J群は全長20m級である。

一方、円墳を中心とするグループでは、a群は全長(直径または一边)80m級、b群は全長70m級、c群は全長60m級、d群は全長50m級、e群は全長40m級、f群は全長30m級、g群



第5図 古墳時代前期の前方後円・後方墳の墳丘規模（全国）



第6図 古墳時代前期の円・方墳の墳丘規模（全国）

第1表 富山県内の前期古墳の集録

古 墳 名	墳 形	立 地	全長 部長	前方 幅	高さ 部長	後方 幅	高さ	段築	蓋石	周溝	階層	時 期	参考文献	
谷内 16号	墳前 方 後 円 墳丘	陵上	47.6	24.5	14.6	1.1	23.1	21.5	3.6	無	無	H	布留最古相	4
関野 1号	墳前 方 後 円 墳丘	陵端	65	31.5	30.5	1.7	34	34	2	無	無	G	布留古和新要	5
中村天塚山	墳前 方 墳丘	独立陵上	33.5	13.5	12.5	2	20	22	2	無	無	I		7
朝日潤山 1号	墳前 方 後 円 墳丘尾根	36	17	10.5	2	19	19	1.2	無	無	無	I		7
桜谷 1号	墳前 方 後 円 墳台地邊縁	62	30	30	5.5	32	32	6	?	無	無	G	前期末か	7~9
* 桜谷 2号	墳前 方 後 円 墳丘	陵端	50	20	20	1	33	33	6	無	無	H		7~9
東野 1古墳群 1号	墳前 方 後 円 墳丘尾根上	33	13	13	2.5	20	20	4	無	無	無	I	前期	11
板原 1号	墳前 方 後 円 墳丘	陵上	65	28	12.8	3	37	40	6	2-3段	無	G		12
一ツ山 1号	墓前 方 後 方 墳か丘陵台地上	26	4	22	22	2	2	無	無	有	無	J	*古式開から後式開	18
五歩一古	墳前 方 後 方 墳丘	陵上	43	18.5	14	2	24.5	27	6	無	無	H	前期か	7~19
舟形山丘陵16古墳	墳前 方 後 円 墳尾根端部	38	18	17	2.4	20	26	5.8	?	無	無	H	?	20
杉谷一高家山	墳前 方 墳台地邊縁	39	16.8	15.6	1	22	21	3	無	無	無	H	前	43
玉 墓	吉 墳前 方 後 方 墳丘	陵端	58	27	26	4	31	31	7.6	無	無	G		22
妙使塚	古 墳前 方 後 方 墳丘	陵端	70	24	24	2.8	46	46	6.3	2	無	G		22
柿沢 5号	墳前 方 後 方 墳尾根上	22.4	9.9	7.8	2.1	12.5	10.6	2.3	無	無	無	J		
柿沢 6号	墳前 方 後 方 墳尾根上	21.8	8.6	6.2	—	13.2	9.6	—	無	無	無	J		
柿沢 7号	墳前 方 後 方 墳山	頂	33.4	14	14	2.7	19.4	19.4	3.7	無	無	I		
竹内天神堂古	墳前 方 墳平	野	45	—	—	—	—	—	—	—	—	H		7

は全長20m級、h群は全長10m級、i群は全長10m以下の墳丘をもつ群である。

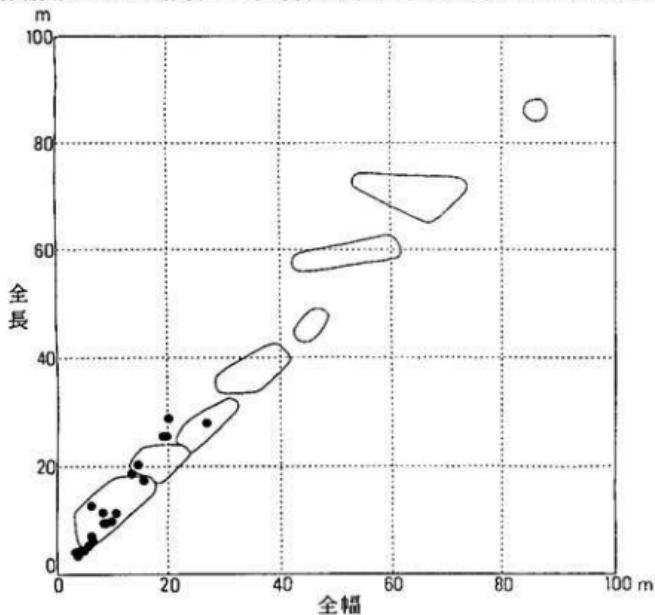
これらの墳丘規模の群別を基礎として、年代の変化を加味しつつ柿沢古墳群について考察を加えることとしよう。

#### ① 越中における位置

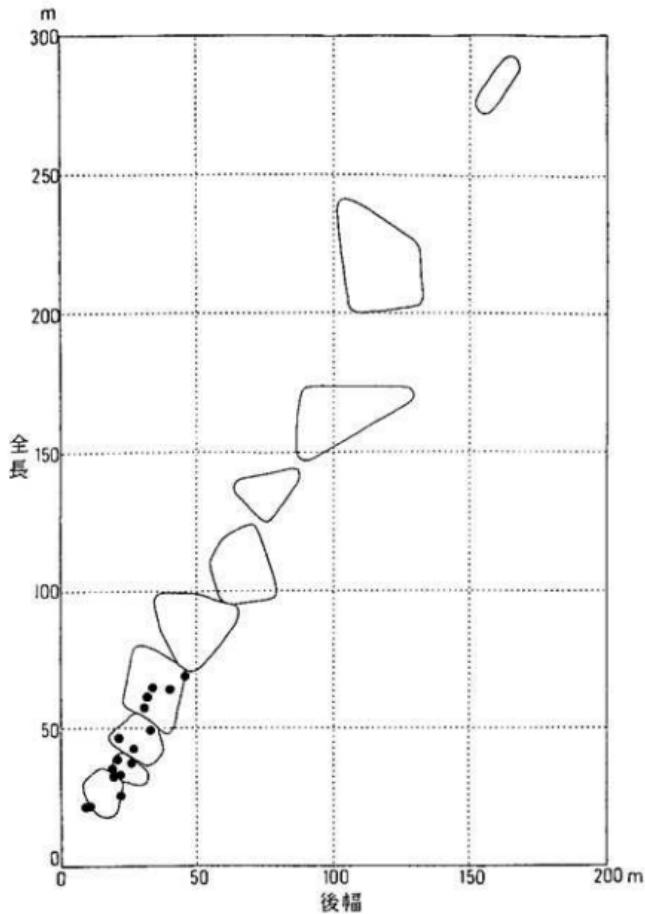
越中における庄内式並行期とそれ以前の主要な墳墓の墳丘規模には、直径または一辺が30m以下のもののが存在する（第7図）。これは前期古墳の規模にあてはめるとf～i群に相当するものである。

このような傾向の中で、本期に該当する可能性が高い柿沢2号墳はf群、1・4号墳はg群、3号墳はh群というように、それぞれの墳墓が別々の規模群に属している。さらに柿沢2号墳は庄内期以前の越中における墳墓の中では、最も大型である群に属している。古墳の築造が少ないといわれる富山県東部地域において、この様な規模をもつ墳墓が存在することは当地域が新川郡域内のみならず越中という地域においても重要な位置を占めていたことを示すものであろう。

古墳時代前期になると、前方後円・後方墳が越中にも出現する。これらの古墳の規模は、越



第7図 庄内式期とそれ以前の墳墓の墳丘規模（越中）



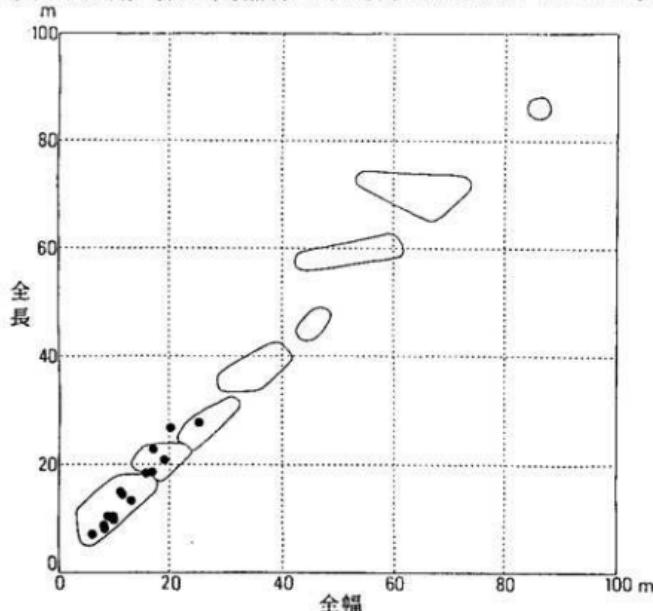
第8図 古墳時代前期の前方後円・後方墳の墳丘規模（越中）

中における主要なものについてみると、全長で25~70mのものがあり、それ以前の墳墓からの大きな飛躍がみられる(第8図)。これは全国区分にみる墳丘規模のG~J群に相当するものである。この中で柿沢古墳群は5・6号墳がJ群、7号墳がI群にそれぞれ属している。規模的にはそれほど大きなものではなく、越中の内でもやや下位の群に位置づけられるであろう。しかしこの中の7号墳が小矢部市閑野1号墳や福井市庄塚古墳と同様に奈良県箸墓古墳の相似墳ないしその類型の古墳と考えられることは、柿沢古墳群が当時の全国的な社会情勢と、密接な関係をもって成立した可能性が高いことを示している。

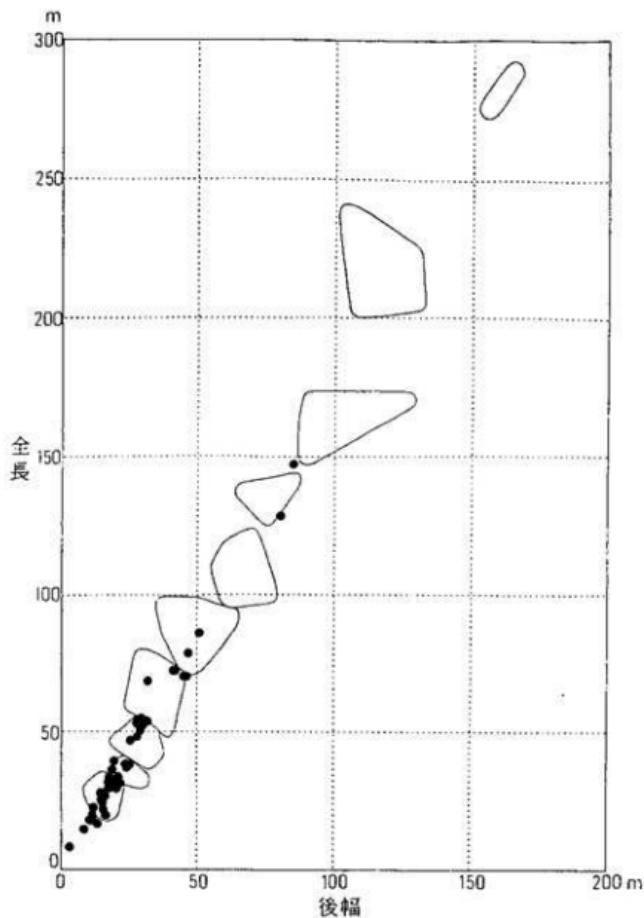
## ② 北陸における位置

越中を除き、若狭・越前・加賀・能登の墳墓・古墳について主要なものを集成し、これらの規模と越中の古墳の規模と比較してみよう。

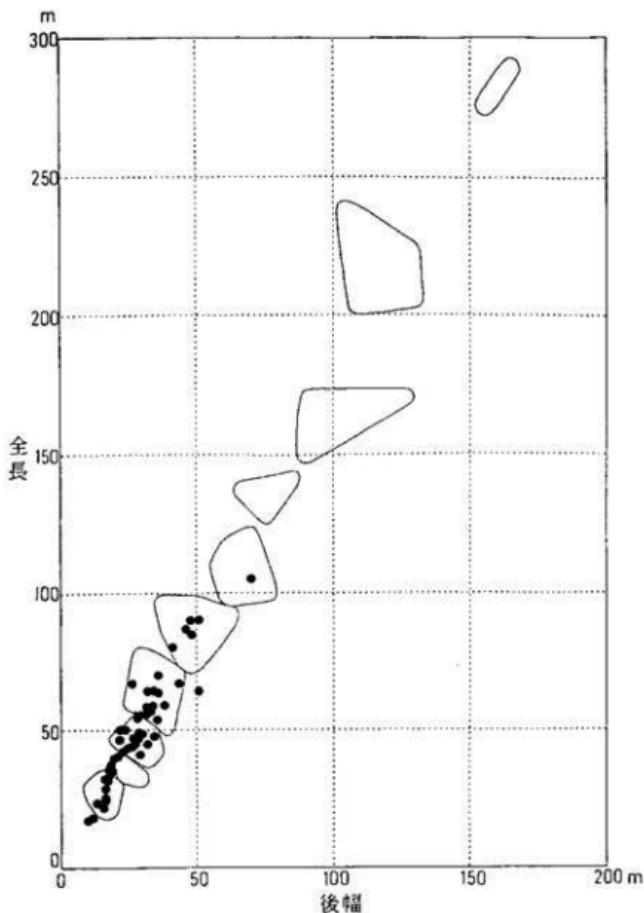
北陸における庄内期までの主要な墳墓においても、直径ないし一辺が30m以上の規模をもつものはほとんどなく、越中の様相とほぼ同じ傾向を見出すことができる(第9図)。最大のものでも石川県加賀市分校カン山1号墳の推定約37mである。このように北陸という地域に拡大した場合にも、当期の墳墓の規模構成には、地域的な差はあまりみられないと考えられる。



第9図 庄内式期とそれ以前の墳墓の墳丘規模(北陸)



第10図 古墳時代前期の前方後円・後方墳の埴丘規模（北陸）



第11図 古墳時代中期以降の前方後円・後方墳の墳丘規模（北陸）

これは同時に北陸という視野からみても、柿沢古墳群の築造された地域が重要な意味をもっていたことを示すものと推測される。

そして北陸においても古墳時代に入ると、前方後円・後方墳が各地に出現するようになる。その墳丘規模においては最大で全長150m近いものが存在しており、越中の様相とは大きく異なっている。このように北陸という地域からみた前期古墳は、より大きな格差を含む、墳丘規模の格づけの中で築造されたと考えられる（第10図）。墳丘規模における群の種類も、越中における構成よりも増加しており、D～J群へと大きく拡大している。その中心は、越前北部にあったと考えてよい。ただしこのような明確な格差の成立を確認できるのは、前期末における福井県手縄ヶ城山古墳の築造以後であり、それ以前においては、より複雑な様相があったと考えられる。

さらに古墳時代中期以後になると、C・D群の規模の古墳がみられなくなる反面（第11図）、越前北部では、相対的に大規模であり、笏谷石製の舟形石棺や豊富な副葬品に特徴づけられる古墳が築造された。そしてこの時期には、能登や越中という東の地域では古墳の円墳化が進んだらしい。この新しい体制は、繼体天王の母方が出自したと記録され、また令制で分割されることになる「越国」に直結するものであったと推察できる。

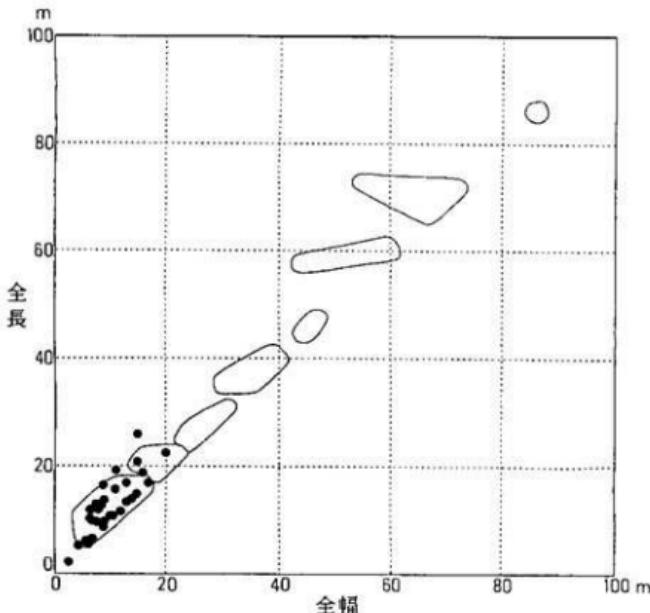
### ③ 前期古墳における位置

ここでは前期古墳全体、特に畿内の古墳との比較検討を行なうこととする。そして上記で得られた結果の総括を行ない、柿沢古墳群のもつ意義についてまとめるにしよう。

畿内の庄内式期とそれ以前の主要な墳墓の規模もまた、繩向型前方後円墳と呼ばれるものを除くならば、30m以上の規模をもつ墳墓がみられないなど、北陸とほぼ同様の現象がある（第12図）。また吉備・出雲などでは、突出部が付く墳墓において、全長30mを越すものが存在しているが、庄内式期までの墳墓の全体数における比率からいうとその数は微々たるものである。

このようなごく少數の墳墓を除くと、大多数の墳墓はどの地域においても規模的には大差のないものであり、その内の格差もごく少なものであったと考えられる。このような状況の中で、突出した規模をもつ墳墓を営む階層が成長しつつあったのであろう。

これに対して畿内の主要な前期古墳は、庄内式期までの墳墓とは大きな規模の違いと普遍性とをもって出現する。またその定型化した前方後円・後方墳は他の地域を圧倒するような大きな幅をもった大小の規模をもって築造されている（第13図）。そして全国の主要な前期古墳に表われたA～J群が、畿内ではこの段階にすでに出現している。このように、畿内の前期古墳は、庄内式期までの墳墓にみられたような比較的均質な状態から大きく脱却したものであり、他の地域から突出した傾向を呈している。そして各地における墳丘規模の格差は、畿内を中心とする地域での秩序の中に位置づけることが出来るのである。

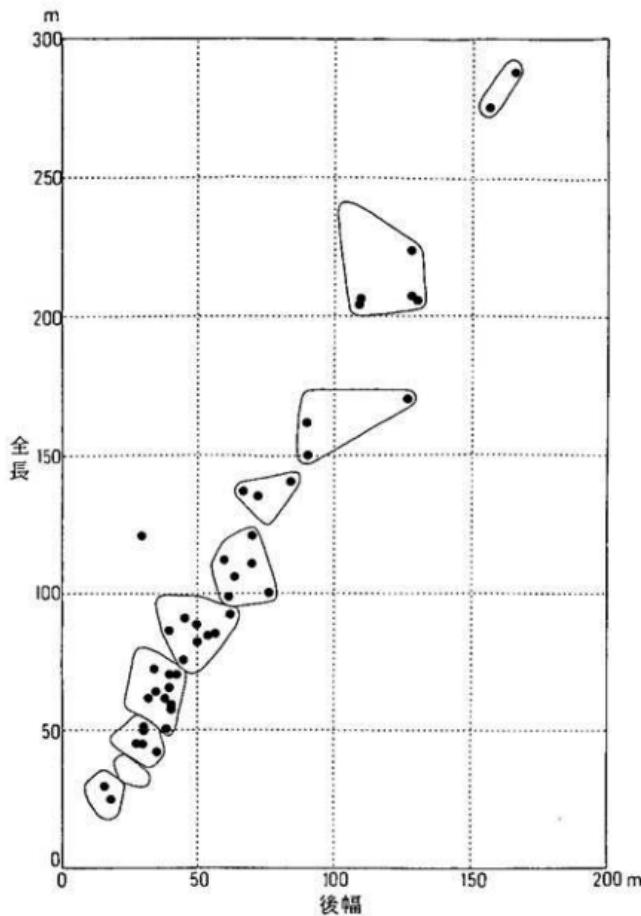


第12図 庄内式期とそれ以前の墳丘規模（方形周溝墓・前方後方形墳墓、畿内）

このような墳丘規模の構成の中において、北陸の前期古墳はD～J群、越中の前期古墳はG～J群に相当し、柿沢第7号墳はI群、第5・6号墳はJ群に属する、と考えることが出来る。そして個々の古墳の規模の大小よりも、それぞれが全国的な秩序において一定の位置を占めたことが重要であると考える。また柿沢古墳群中でも、第7号墳は全長が約33mであり、形態的にも撥形を呈する前方部をもち、小矢部市閑野1号墳の2分の1、すなわち箸墓古墳の8分の1規模のものであったと考えられることから、同古墳群中でも特別の位置にあったと考えてよいであろう。

古墳の分布と内容を見るならば、必ずしも畿内を中心として同心円的・連続的に小規模化・貧弱化していくわけではなく、そこには当時の社会的関係が色濃く反映していたと推測出来る。そして柿沢古墳群は、日本海側における前期古墳の分布を考える上で、重要な位置を占めるであろう。すなわち柿沢古墳群が所在する越中新川郡の地域においてまでは、古墳時代の当初から当時の社会秩序を体现する造墓活動が、郡単位の密度でなされたと考えられる。勿論、越後においても前期古墳が存在するが、今のところその数は少なく越中・越後の境である親不知が、当時の古墳文化において一つの境界をなしたと推察されるのである。

（亀井 聰）



第13図 古墳時代前期の前方後円・後方墳の墳丘規模（墓内）

## 2 集 落

柿沢古墳群が弥生時代末～古墳時代前期の墳墓ないしは古墳である可能性がかなり高いと考えられるが、その造営基盤となる集落が周辺に存在するはずである。本稿ではその点について考えてみたい。

古墳群が立地する山地は新川平野の南東隅に位置し、平野のほぼ全体を眼下に見下ろすことのできる位置にある。第1章でも述べたようにこの平野は、上市川・白岩川によって形成された扇状地であり、比較的安定した居住空間であったようである。この地域では、縄文時代後期後半以降人々の営みがあったようであり、藤田富士夫氏の作成された富山平野中部の縄文晩期遺跡の分布図（1979藤田）<sup>3</sup>でもすでに10以上の遺跡が確認されている。また、1979年の北陸自動車道建設に先立つ調査でも縄文時代後期後半から弥生時代・古代・中世に至る遺跡が次々と発見された。水橋地区でも金尾遺跡（縄文後・晩期・弥生中・後期、古墳前期、奈良・平安、中世）、小出遺跡（縄文後期・弥生中・後期、古墳前期、奈良・平安、中世）、小池遺跡（弥生後期・古墳前期、奈良・平安）、専光寺遺跡（奈良・平安、中世）、中野遺跡（弥生中・後期、古墳前期、奈良・平安、中世）、金尾新遺跡（縄文晩期・奈良・平安）、新堀遺跡（縄文晩期・弥生後期・古墳前期）などの遺跡が、富山市教育委員会、岡崎卯一<sup>4</sup>、麻柄一志<sup>5</sup>・幸子夫妻<sup>6</sup>、富山市考古サークル<sup>7</sup>の諸氏によって紹介されている。

これらの遺跡は、時代こそちがえ、いずれも沖積平野に立地する遺跡群であり、県東部地区にあって最も密集する地域である。このことは柿沢古墳群が成立する経過を考える上で極めて重要な事柄であることを前置しておきたい。

ここで、話を柿沢古墳群が成立したと考えられる弥生時代後期から末期・古墳時代前期に焦点を移したい。弥生時代の遺跡は、本地域に於いては、分布調査で発見されたものを含めると37遺跡を数える。このなかで発掘調査が行われているものは北陸自動車道建設に先立つ調査で発見された正印新・中小泉・飯坂・江上A・江上Bの5遺跡である。これらの遺跡は、弥生時代中期と後期に形成されたものである。

この調査報告書のなかで、久々忠義氏は、これらの遺跡が相互に関連性のある集落（正印新・江上A・江上B）、耕地（中小泉）、墓地（飯坂）からなり、飯坂遺跡を中心とする径約2kmの圏内を農業共同体の村（江上弥生遺跡群と総称）と意義づけている。さらに氏は、県内の前方後円墳や前方後方墳の分布と弥生遺跡群の分布の対応関係からもこの農業共同体について論じ、県内の弥生集落が1～3棟の竪穴住居と1棟の倉庫で構成され、こうした小集落が2～3群集って農業共同体を構成し、共同墓地を形成していると指摘した。この考えは、小視眼的には、遺跡相互の時期に若干の問題を残すが、大局的にみて大過ないものと考える。この意味から江上

弥生遺跡群が農業共同体として形作られるのは、飯坂遺跡の方形周溝墓群の時期と考えられ、その出土遺物から塚崎Ⅰ・Ⅱ式、もしくは漆町2群前後の弥生時代後期後半から末期にかけてと考えられる。

この時期の直後の遺跡として柿沢古墳の膝下の湯神子遺跡が挙げられる。この遺跡は、1991年に上市町教育委員会が調査した。遺跡の特徴は、縄文時代中期前葉と弥生時代末から古墳時代、さらに奈良・平安時代にまたがる複合遺跡であり、断続的であるが度々居住地として意識された地区である。弥生時代末期から古墳時代にかけては、その出土遺物から法仏式の最終段階から月影I式期（谷内尾1983）<sup>44</sup>に比定され、弥生時代から古墳時代へ移行する過渡期の遺跡ということができよう。

前記、(1)古墳の項でも推定したとおり柿沢古墳群の第1～4号墳に対応する遺跡と考えるが、遺物が一定地区に集中することや出土遺物の絶対量からみて、1～2程度のごく小さい家族集団の遺跡と考えられる。柿沢第1～4号墳がこの集団と深くかかわっていた可能性は高いが、この小集団だけで造営されたとは考えにくく、この様な遺跡が他にも存在していたものと考える。これは、この時期が、弥生時代の集落が分散化する時期であり、飯坂遺跡の方形周溝墓群を造営した江上弥生遺跡群が廃絶、小集落に分散していったことを示すものではないだろうか。湯神子遺跡とほぼ同時期の遺跡と考えられる、上市町砂林北遺跡（上市町教育委員会1989）、やや遅れて古墳時代前期の、本江広野新遺跡（小島1979）<sup>45</sup>などは、こうした過程のなかで出現した遺跡と考えたい。

ところが、この時期を境として古墳時代初頭の遺跡は、極端にその数を減少させる。柿沢古墳の第5～7号墳は、古墳時代前期でも古い段階の築造と考えられるが、湯神子遺跡においてはこの時期の遺物が出土せず、廃絶したものと考えられる。第5～7号墳にかかる遺跡は、塚崎Ⅲ式からこれに後続する北陸土師器第II様式の遺跡と考えるが、これらの遺物を出土する遺跡は極端に少なく、上市川・白岩川流域でも正印新遺跡と金尾遺跡、小池遺跡、土師器第II様式に至って本江広野新遺跡が出現するほかは類例を探すのが困難な状況である。この傾向は、第III様式期まで続いている。

この時期に於ける遺跡の減少は北陸地方全体の現象であり、集落の立地もしくは集落構造の変化が北陸全体の規模で起ったことを示すものではなかろうか。こうした時期に造営されたと考えられる第5～7号墳は、当地域の集落立地の大きな変化のなかで出現したものであり、周辺地域でのさらなる調査研究と、柿沢古墳群そのものより詳細な調査の必要性を提示していると考える。

### 3 結 び

以上、上市町柿沢古墳群の測量調査成果から、出来る限りの考察を加えた。本古墳群は、從来は後期古墳群と推定されていたものであり、日本海域における古墳文化を考える上でも、少なからぬ意義をもっていると考えられた。これらの古墳群は未調査であり、後期の円墳群である可能性も充分に考慮しておかなければならない。ただし測量調査の結果、これらが年代の遡るものである可能性も生きてきた。このことを前提として、ここで考察した諸点をまとめて提示しておきたい。

柿沢古墳群は、標高約100mから130mの丘陵尾根上に立地する古墳群である。この内、柿沢第1～4号墳は、小さな突出部をもつ不整形な円形墳墓であり、弥生時代末に属することを推定した。これに対して、第5・6号墳は細身の前方部をもつ前方後方墳、第7号墳は撥形の前方部をもつ前方後円墳であり、第1～4号墳→第5号墳→第6号墳→7号墳という順番に築造されたことを推察した。年代は他の諸例とも比較して、第4号墳と第5号墳の境を畿内庄内式と布留式の交の墳に比定した。

また特に7号墳については、富山県小矢部市関野1号墳・婦中町王塚古墳という、奈良県箸墓古墳と相似の関係をもつ古墳との関連において位置づけた。全長において若干（約1m）の誤差はあるものの、柿沢第7号墳は、箸墓の八分の一、関野1号墳の二分の一規模のものであると評価している。

そして、越中の各地域の古墳群の動向と対比した結果、それらが密な関係をもちつつ営まれ、かつその動きが当時の全国的な古墳築造の動向を鋭敏に反映していたという仮説が得られた。大切な点は、越中においては古墳時代開始期の造墓活動を、旧国郡単位のレベルで検討できるようになったことである。

前期古墳は、越中以東の越後北部においてまで営まれたことが判明しているが、越中・越後国境の親不知を境として、これより東ではかなり散発的であり、西では郡程度の領域を単位とする造墓がなされたと考えることが出来るようになった。この点に、柿沢古墳群のもつ意義の一端があるであろう。

日本海域においては概して、若狭・越前より東へ行くほど、古墳の数が減少し、規模が小さくなっていく傾向はあるが、それは決して一方向に遞減していくというようなものではない。詳しく見るならば、各時期毎に複雑な現象があり、当時の諸勢力の社会的関係を知る手掛かりとなるであろう。この点において、柿沢古墳群は規模は小さいものの、全国的な古墳時代前期社会の始まりを考える上でも、少なからぬ情報を内包するものである。

集落についてみても、当時期は大きな転換期である。上市町の平野においては、弥生時代後

期の大集落である江上遺跡群が営まれる段階（畿内第V様式～庄内式前半並行）、これが廃絶して柿沢古墳群膝下の湯神子遺跡のような小集落が成立する段階（畿内庄内式後半並行期）、さらに確認できる遺跡が激減する段階（畿内布留式並行）を想定できる。このような変化は、ほぼ北陸の全域で見ることができるものである。そしてこれらの集落の動きが柿沢古墳群の始まりと関係した可能性が高いであろう。おそらくは湯神子遺跡の成立が、柿沢第1～4号墳の築造と関わり、その廃絶が柿沢第5～7号墳の築造と関係したものと推察しておきたい。

これらの古墳・集落の動向は、畿内・東海の土器様式の伝播とも連動するものであり、当時の大きな社会的変化を反映するものであろう。

今後、柿沢古墳群を初めとして、より詳細な事実が明らかになれば、これらの諸点についてさらに具体的な歴史として記述できるようになるであろう。

## 参考文献

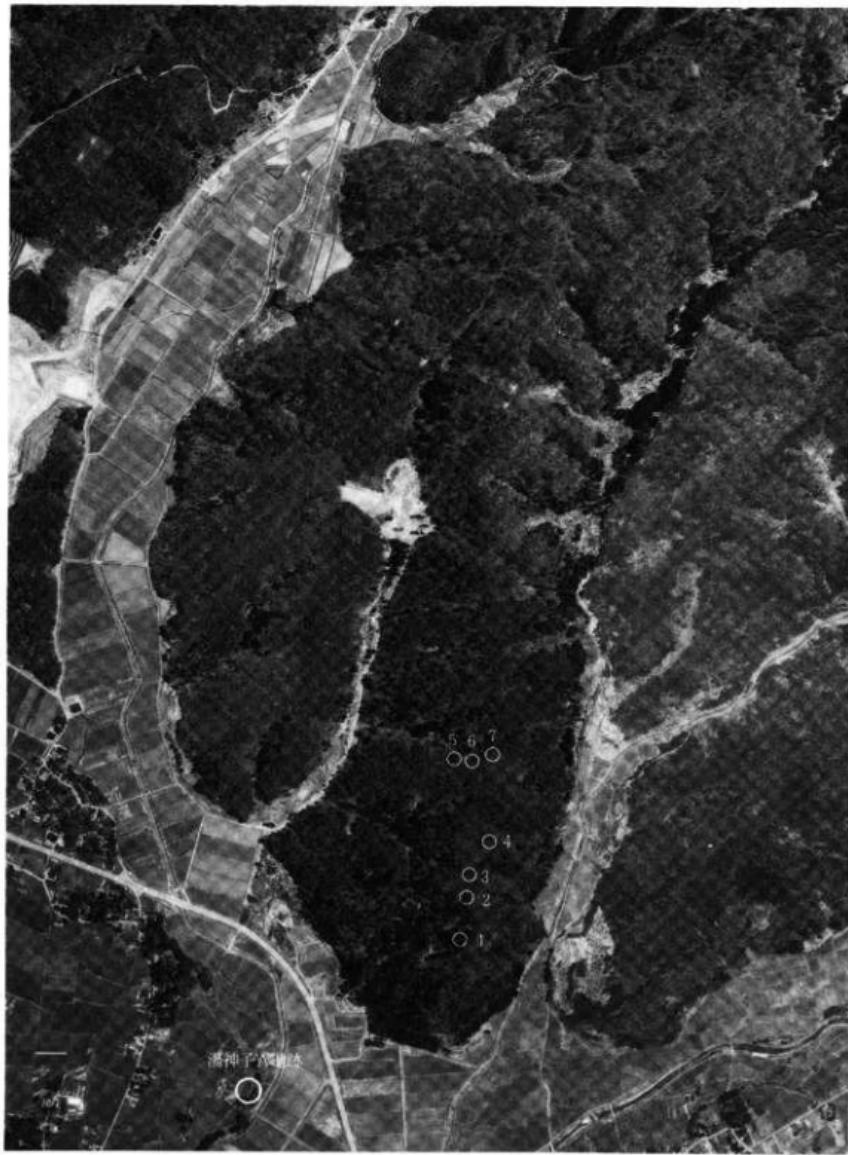
- 1 久々忠義「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町土器・石器編、上市町教育委員会、1982年。
- 2 久々忠義「総括」『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町木製品・総括編、上市町教育委員会、1984年。
- 3 高慶孝『富山県上市町湯神子A遺跡発掘調査概報』上市町教育委員会、1992年。
- 4 富山大学人文学部考古学研究室『谷内16号古墳』富山大学考古学研究報告第2冊、1988年。
- 5 富山大学人文学部考古学研究室『関野古墳群』富山大学考古学研究報告第1冊、1987年。
- 6 伊藤隆三ほか『富山県小矢部市平桜川東遺跡発掘調査概要』小矢部市教育委員会、1979年。
- 7 岸本雅敏「越中」『前方後円墳集成』中部編、近藤義郎編、山川出版社、1992年。
- 8 藤田富士夫『日本の古代遺跡』13富山、保育社、1983年。
- 9 古岡英明「古墳時代」『富山県史』考古編、1972年。
- 10 高岡市教育委員会『石塚遺跡 現地説明会資料』1991年。
- 11 山口辰一『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』V高岡市埋蔵文化財調査概報第5冊、高岡市教育委員会、1988年。
- 12 富山県教育委員会1『昭和56年度富山県埋蔵文化財調査一覧』1982年。
- 13 上野章・押川恵子『布目沢北遺跡発掘調査概要』大門町埋蔵文化財調査報告第6集、大門町教育委員会、1990年。
- 14 山本正敏ほか『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告』(1) 大門町埋蔵文化財調査報告第7集、富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会、1991年。
- 15 中山修宏『串田新遺跡』II大門町埋蔵文化財調査報告第2集、大門町教育委員会、1981年。
- 16 橋本正「小杉町圓山遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書』II、富山県教育委員会、1972年。
- 17 久々忠義・関清『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』(2)、富山県教育委員会、1984年。
- 18 関清ほか『三谷遺跡・一つ山古墳群』富山県埋蔵文化財センター、1989年。

- 19 岸本雅敏「小杉町五分一発見の前方後方墳」『連絡誌』70、富山考古学会、1977年。
- 20 藤田富士夫『富山市呉羽山丘陵古墳群分布調査報告』富山市教育委員会、1984年。
- 21 久々忠義「婦中町富崎四隅突出型墳丘墓」『埋文とやま』第32号、富山県埋蔵文化財センター、1990年。
- 22 富山大学人文学部考古学研究室『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告』富山大学考古学研究報告第4冊、1990年。
- 23 岸本雅敏「飯坂遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町土器・石器編、上市町教育委員会、1982年。
- 24 宇野隆夫「富山県上市町柿沢古墳群測量調査の成果」富山考古学会調査成果発表会資料、1992年。
- 25 富山県教育委員会『昭和58年度富山県埋蔵文化財調査一覧』1984年。
- 26 山本正敏・松本幸治ほか『富山県小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会、1978年。
- 27 小木木治太郎「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』II（石川考古学研究会々誌第32号）、石川考古学研究会、1989年。
- 28 これについては、高橋浩二「北陸における古墳出現期の社会構造—土器の計量的分析と古墳から—」として別に発表する予定である。
- 29 田嶋明人「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡』I、石川県埋蔵文化財センター、1986年。
- 30 寺沢薰1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第49冊、奈良県立橿原考古学研究所。
- 31 亀井聰『古墳時代前半期における石製腕飾類出土古墳の検討』1993年（富山大学人文学部提出修士論文）。
- 32 宇野隆夫・小木木治太郎「王塚・勅使塚古墳と箸墓古墳」『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告—北陸の前方後円・後方墳の一考察—』1990年。
- 33 岸本雅敏「越中」「前方後円墳集成」中部編、1992年。
- 34 田島富慈美「北陸における前方後円・後方墳の墳丘の変化と意義」『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告—北陸の前方後円・後方墳の一考察—』1990年。
- 35 藤田富士夫1982「上市町柿沢古墳群の紹介」『富山考古学会連絡紙』83
- 36 藤田富士夫1979「富山市遺跡地図」富山市教育委員会。
- 37 吉岡康輔1967「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』
- 38 水橋町1966『水橋郷土史』第二巻

- 39 考古サークル編1977『富山市内遺跡探訪』富山市教育委員会
- 40 岡崎卯一1967「水橋小出の遺物」『富山考古学会連絡紙』21
- 41 真柄一志・真柄幸子1982「白岩川流域における遺跡群の形成-初期農耕文化の成立をめぐって-」『かんとりい』No.6 越中の歴史と文化を考える会
- 42 谷内尾吉司1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 43 上市町教育委員会1989『上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』
- 44 小島俊彰1979「本江遺跡」『滑川市史考古資料編』

# 図 版

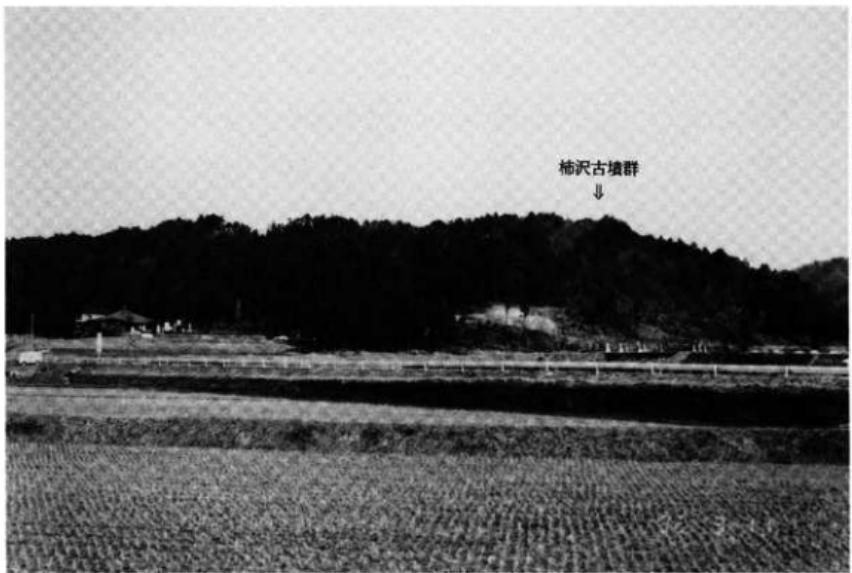




縮尺約 1/20000

図版二 調査地域航空写真(1)





1 柿沢古墳群遠景（南西から）



2 柿沢第1号墳の墳丘（西から）



1 柿沢第1号墳の墳丘（東から）



2 柿沢第1号墳の突出部（西から）



1 柿沢第2号墳の墳丘（西から）



2 柿沢第2号墳の突出部（西から）



1 植沢第3号墳の墳丘裾と突出部（西から）



2 植沢第4号墳の墳丘（西から）



1 柿沢第5号墳の墳丘（前方擧・北から）



2 柿沢第6号墳の後方部（前方部・北から）



1 柿沢第6号墳の前方部（後円部・南から）

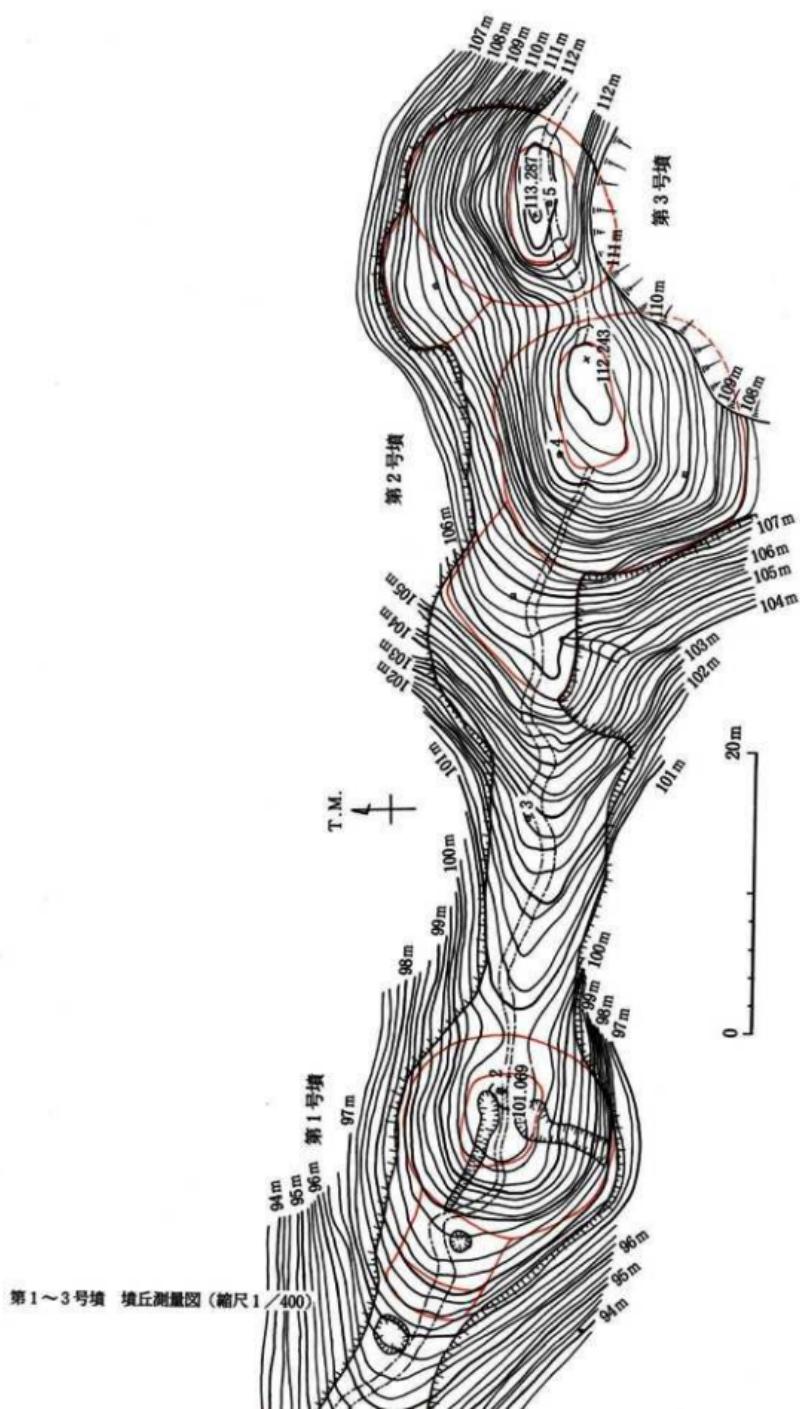


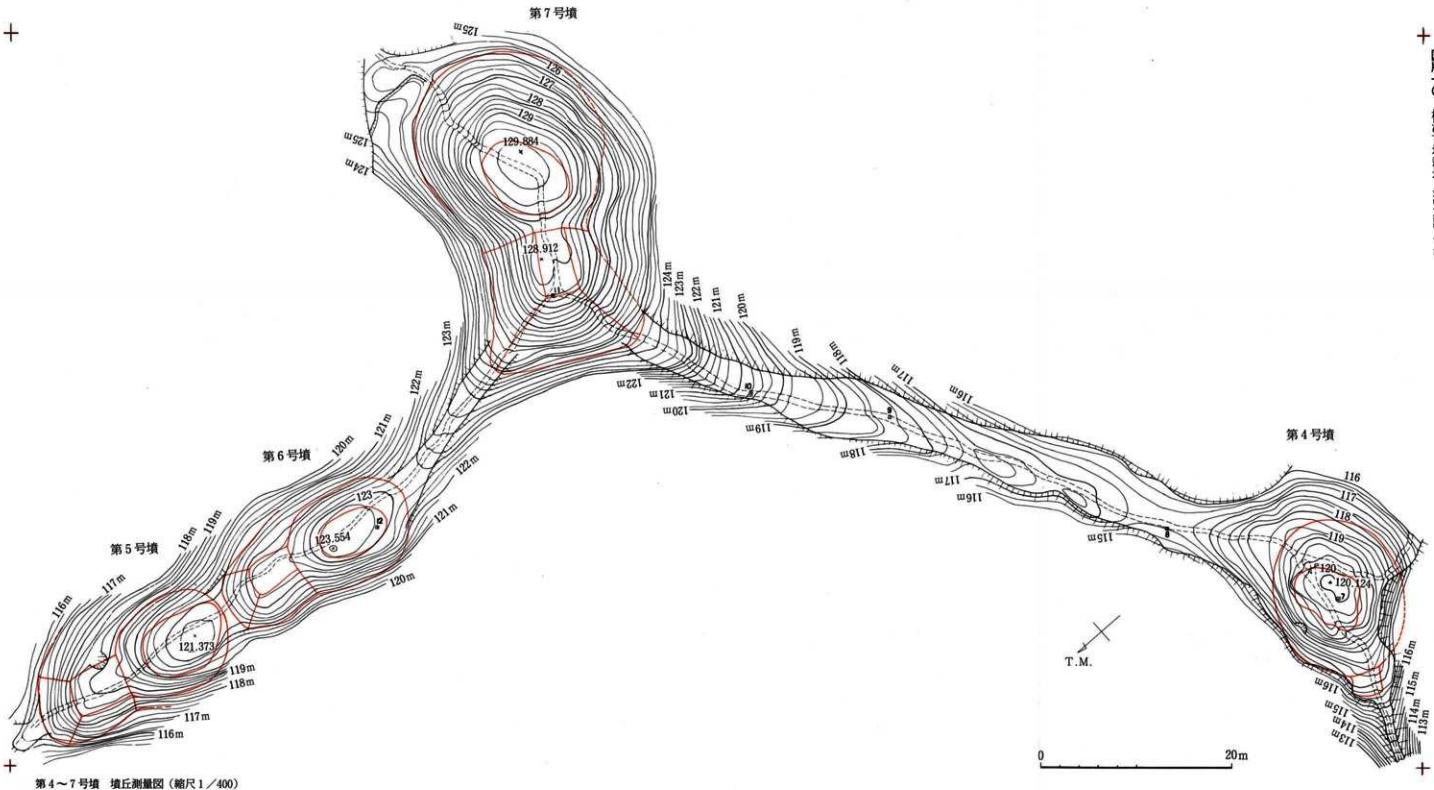
2 柿沢第7号墳

図版九 柿沢古墳群配図図



縮尺 1/5000





1993年3月25日 印刷

1993年3月31日 発行

## 富山県上市町柿沢古墳群

### 第1次測量調査報告

編集・発行

上市町教育委員会  
富山大学考古学研究室

印 刷

第一共同印刷株式会社

